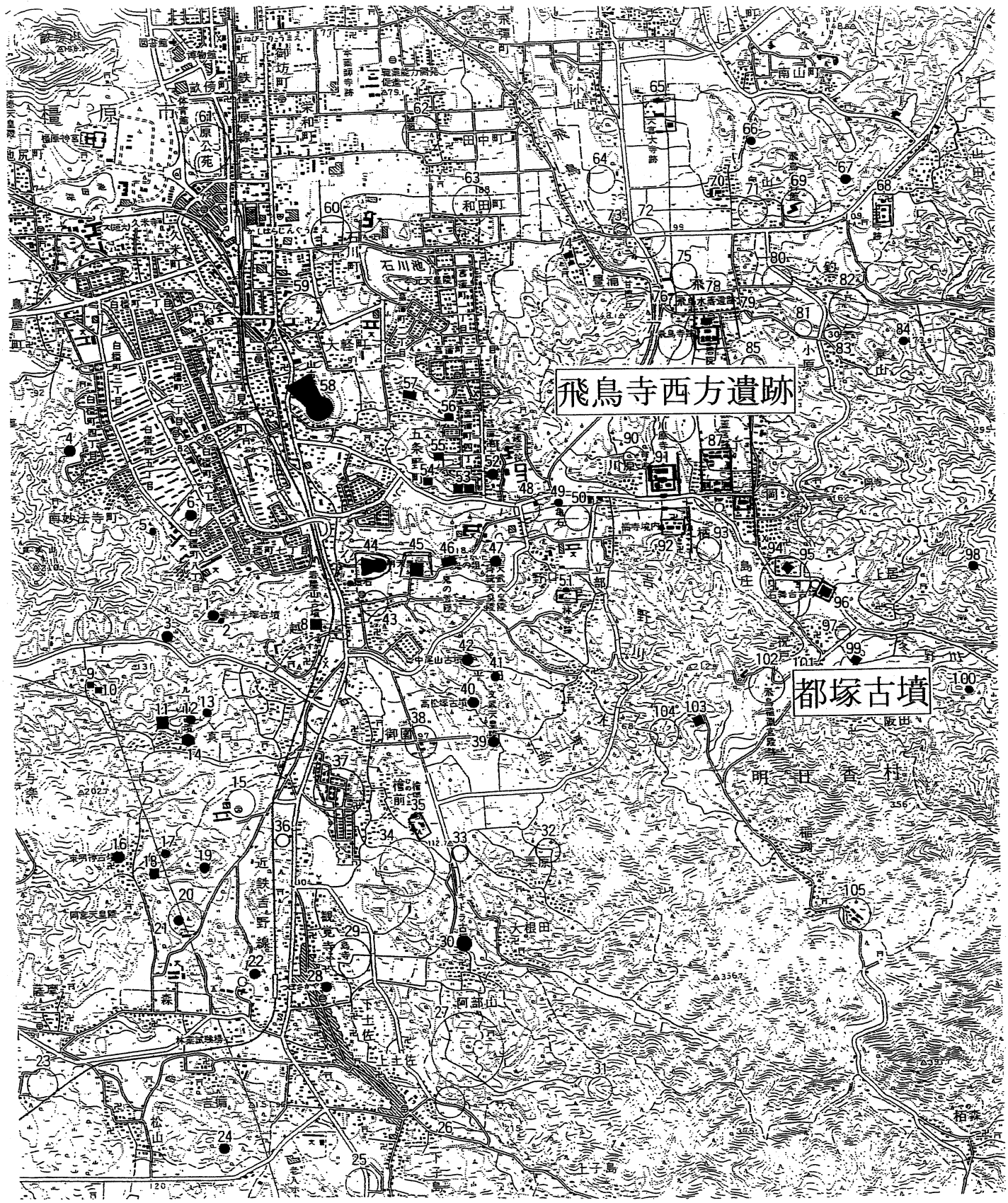
平成27年3月1日
明日香村教育委員会

明日香村発掘調査報告会
2014

開　　会 1：00～
調査報告 1：10～
「飛鳥寺西方遺跡の調査」長谷川 透
「都塚古墳の調査」　　西光 慎治

(都塚古墳 墳丘東南隅コーナー部分)

講　　演 3：00～
「石舞台古墳とその時代」
講師　米田 文孝　氏
関西大学文学部教授



1.牽牛子塚古墳　2.越塚御門古墳　3.真弓鑵子塚古墳　4.小谷古墳　5.益田岩船　6.沼山古墳　7.与楽古墳群　8.岩屋山古墳　9.スズミ1号墳　10.スズミ2号墳　11.カヅマヤマ古墳　12.真弓ミヅツ古墳　13.真弓テラノマエ古墳　14.マルコ山古墳　15.佐田遺跡群　16.束明神古墳　17.佐田2号墳　18.佐田1号墳　19.出口山古墳　20.森カシタニ遺跡　21.森カシタニ塚古墳　22.向山1号墳　23.薩摩遺跡　24.松山吞谷古墳　25.清水谷古墳　26.ホラント遺跡　27.阿部山遺跡群　28.稲村山古墳　29.観覚寺遺跡　30.キトラ古墳　31.阿部山廃寺　32.呉原寺跡　33.檜隈門田遺跡　34.檜前大田遺跡　35.檜隈寺跡　36.坂ノ山古墳群　37.檜前上山遺跡　38.御園チシアイ遺跡・御園アリイ遺跡　39.塚穴古墳　40.高松塚古墳　41.火振山古墳　42.中尾山古墳　43.平田キタガワ古墳　44.梅山古墳　45.カナヅカ古墳　46.鬼の俎・雪隠古墳　47.野口王墓古墳　48.川原下ノ茶屋遺跡　49.亀石　50.西橘遺跡　51.定林寺跡　52.菖蒲池古墳　53.五条野宮ヶ原1号墳・2号墳　54.五条野向イ古墳　55.五条野城脇古墳　56.五条野内垣内古墳　57.植山古墳　58.五条野丸山古墳　59.軽寺跡　60.石川精舎　61.橿原遺跡　62.田中廃寺　63.和田廃寺　64.雷丘北方遺跡　65.大官大寺跡　66.カセヤ塚古墳　67.庚申塚古墳　68.山田寺跡　69.上の井出遺跡　70.奥山久米寺跡　71.奥山リウゲ遺跡　72.雷丘東方遺跡　73.雷丘　74.豊浦寺跡　75.石神遺跡　76.飛鳥水落遺跡　77.飛鳥寺西方遺跡　78.飛鳥寺跡　79.飛鳥東垣内遺跡　80.竹田遺跡　81.小原シウロ遺跡　82.八釣・東山古墳群　83.東山マキド遺跡　84.金鳥塚古墳　85.飛鳥池工房遺跡　86.酒船石遺跡　87.飛鳥京跡　88.飛鳥京跡苑池　89.甘樫丘東麓遺跡　90.川原寺裏山遺跡　91.川原寺跡　92.橘寺跡　93.東橘遺跡　94.島庄遺跡　95.石舞台1～4号墳　96.石舞台古墳　97.馬場頭古墳群　98.打上古墳　99.都塚古墳　100.戒成組田古墳　101.坂田寺跡　102.飛鳥稲淵宮殿跡　103.塚本古墳　104.朝風廃寺　105.稲淵ムカンダ遺跡

飛鳥地域周辺遺跡分布図（1：25000）

飛鳥寺西方遺跡の調査

明日香村教育委員会

調 査 地：奈良県高市郡明日香村大字飛鳥
調査原因：範囲確認調査
調査面積：327 ㎡
調査期間：2014 年 9 月 8 日～現在継続中

1．はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥寺西門の西側を南北約 200m、東西約 200mにわたって広がる飛鳥時代の遺跡である。この範囲確認調査は飛鳥寺西方遺跡の範囲と構造を明らかにすることを目的としている。平成 20 年度から実施し、今回で 7 年目の調査になる。

今年度の調査地は、飛鳥寺西門跡から西へ約 100mにある水田である。今年度は 25 年度に実施した調査地と同一の水田であるが、今回は 25 年度調査区の北側を幅約 1.5m分重複させながら未調査部分である北側に新たな調査区を設定した。25 年度調査区では飛鳥時代の石組溝や砂利敷のほか、焼土が詰められた土坑列を 13 基分検出した。この土坑の広がりと性格を明らかにすることを目的に今年度は調査を実施した。今回は調査区を 4 か所設定し、調査面積は 327 ㎡である。

飛鳥寺西側一帯は、『日本書紀』に度々登場する「飛鳥寺西槻」の地に推定されている。この「飛鳥寺西槻」は、壬申の乱時には軍営が置かれ、蝦夷や隼人などの辺境の人々への饗宴が行われた場所として記されている。このほか、大化の改新前夜に、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通じて出会った場所とも考えられている。文献史料を読み解くと、飛鳥寺の西側には、槻の樹があり、大勢の人々を集めて饗宴や軍営を置くほどの広い空間が広がる“槻樹の広場”があったと考えられている。

飛鳥寺西方遺跡はこの“槻樹の広場”の候補地と考えられ、過去にも発掘調査が行われた。本調査地の南に広がる小字「土木」では橿原考古学研究所が飛鳥京第 77 次調査を行い、調査区の東側で掘立柱塀や石組溝、西側では氾濫原を確認した。また飛鳥京 168 次調査では、西門から西へ 120m付近で西門へ延びる参道と見られる石敷を検出した。一方、明日香村教育委員会は 20 年度に本調査地の北側にある水田で調査を行い、石列の一部を確認した。25 年度の調査は前述したとおりであるため、飛鳥寺西門跡の西側正面は飛鳥時代の遺構が良好に遺存していることが明らかとなってきた。

2．主な検出遺構と出土遺物

周辺の地形は南東から北西にかけて緩やかに傾斜するため、調査区の東側では現代の耕作土の直下（地表下約 20 ㎝）で飛鳥時代の遺構面となる。調査区の西側は、後世の包含層が堆積し、地表下約 1 mで遺構面となる。飛鳥時代の遺構で検出を行い、建物跡 2 棟と砂利敷を検出した。

建物跡

１・２・４区で建物跡を２棟検出した。２棟の建物が東西に軒をそろえて並ぶが、建物１と建物２の間は６ｍの空閑地がある。建物の柱間は南北２間、東西７間で、いわゆる長舎建物に相当する。建物１は南北長 4.8m、東西長 16.7mを測り、床面積は 80.16 ㎡、建物２は南北長 4.8m、東西長 17.5mを測り、床面積は約 84 ㎡である。柱間寸法は 2.5～2.7 mとややばらつきがある。建物方位は東西方向の正方位である。柱穴は平面規模が 33～116 ㎝で、深さは約 30 ㎝を測る。柱穴の平面形は円形や長楕円形、不整方形と様々である。柱掘形の埋土は橙色や赤色を呈し、埋土の充填状態に粗密がある。埋土は赤色化した焼土からなる。建物１では一部の掘方埋土に人頭大の石が認められるが、埋める際に落とし込まれたとみられる。柱穴の規模や形状、柱間寸法にばらつきが多いことから、規格を持たせつつも限られた期間だけ建てられた仮設の建物であったと考えられる。また、建物から焼けた部材、炭化材や被熱痕跡は確認できないため、建物自体が焼亡した状況は見出しがたい。

砂利敷

全調査区で検出した。３～10 ㎝大の小石や砂利を敷きつめる。調査区の東側では残りがよく、密に敷き詰めているのがわかるが、西側は石が広い範囲で欠落し遺存状態はよくない。２・４区の砂利敷は調査区の東西で遺存状況が異なり、西側は細かい小砂利を密に施し、東側は礫が粗く施されたうえに瓦などの遺物が多く出土した。また、砂利敷の下には建物２の柱掘形がみえることから、建物２が廃絶後に砂利敷が施されたことがわかった。

出土遺物と遺構の年代

調査区全体で土師器、須恵器、瓦、玉製品、獣歯、鉄滓、鞴羽口などが出土した。これらの遺構に伴って時期を特定できる遺物は出土していないため、厳密な時期を明らかにすることはできなかった。しかし、これらの遺構が、奈良時代の土器や縄叩きの平瓦を含む遺物包含層に覆われ、かつ、検出面である整地土から飛鳥寺の星組の瓦が出土することからみて、これらの遺構が掘削、整備されたのは飛鳥時代であることに間違いない。

３・まとめ

今回の調査によって、飛鳥寺西方遺跡ではじめて飛鳥時代の建物跡を確認することができた。25 年度に性格不明の焼土坑列としていたものが建物の柱掘形の埋土であったことも判明した。これらの建物は、隣接する石神遺跡や水落遺跡でみられるような同時代の建物とくらべると、建物規模や柱の構造などが小規模でやや粗雑な印象が否めない。建物柱穴の直上に砂利敷に覆われている状況からすると建物廃絶後の時間がたたないうちに砂利敷を施していると考えられる。こうした出土状況からみて、建物跡は常設の施設としてではなく、一時的に造られた仮設建物であったと考えられる。この建物の性格としては、『日本書紀』の飛鳥寺西槻との関連から考えて、饗宴施設や壬申の乱前後に建てられた仮設建物であったと推測される。これまでの調査では、飛鳥寺西側は石敷の広場として土地利用がなされていたことが明らかになりつつあったが、今回の調査によって飛鳥寺西における新知見を得る成果となった。今後の周辺の調査によって、建物の詳細な時期や性格、飛鳥寺西の広場の全貌解明が期待される。

※※※飛鳥寺西に関する史料（『日本書紀』）※※※

① 皇極三年（644）正月乙亥朔条
中臣鎌子連、（中略）偶に中大兄に、法興寺の槻樹の下に、打毬の侶に預りて、皮鞋の毬の隨に脱げ落つるを候りて、掌中に取置ちて、（後略）

② 孝徳即位前紀大化元年（645）六月乙卯条
天皇、皇祖母尊、皇太子、大槻樹の下に群臣を召集めて盟はしめたまふ。

③ 斉明三年（657）七月辛丑条
須彌山（しゅみせん）の像を飛鳥寺の西に作る。且つ盂蘭盆会（うらぼんのえ）を設く。暮に都貨邏人（とくわらびと）に饗（あへ）たまふ。

④ 斉明5（659）年三月
甘橿丘の東の川上に、須彌山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。

⑤ 天武元年（672）六月己丑条
爰に留守司高坂王、及び兵を興す使者穂積臣百足等、飛鳥寺の西の槻の下に據りて営を為す。（中略）爰に百足馬に乗りて緩く来れり。飛鳥寺の西の槻の下に逮るに、（後略）

⑥ 天武六年（677）年二月条
是の月、多禰（たねの）島人等に飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。

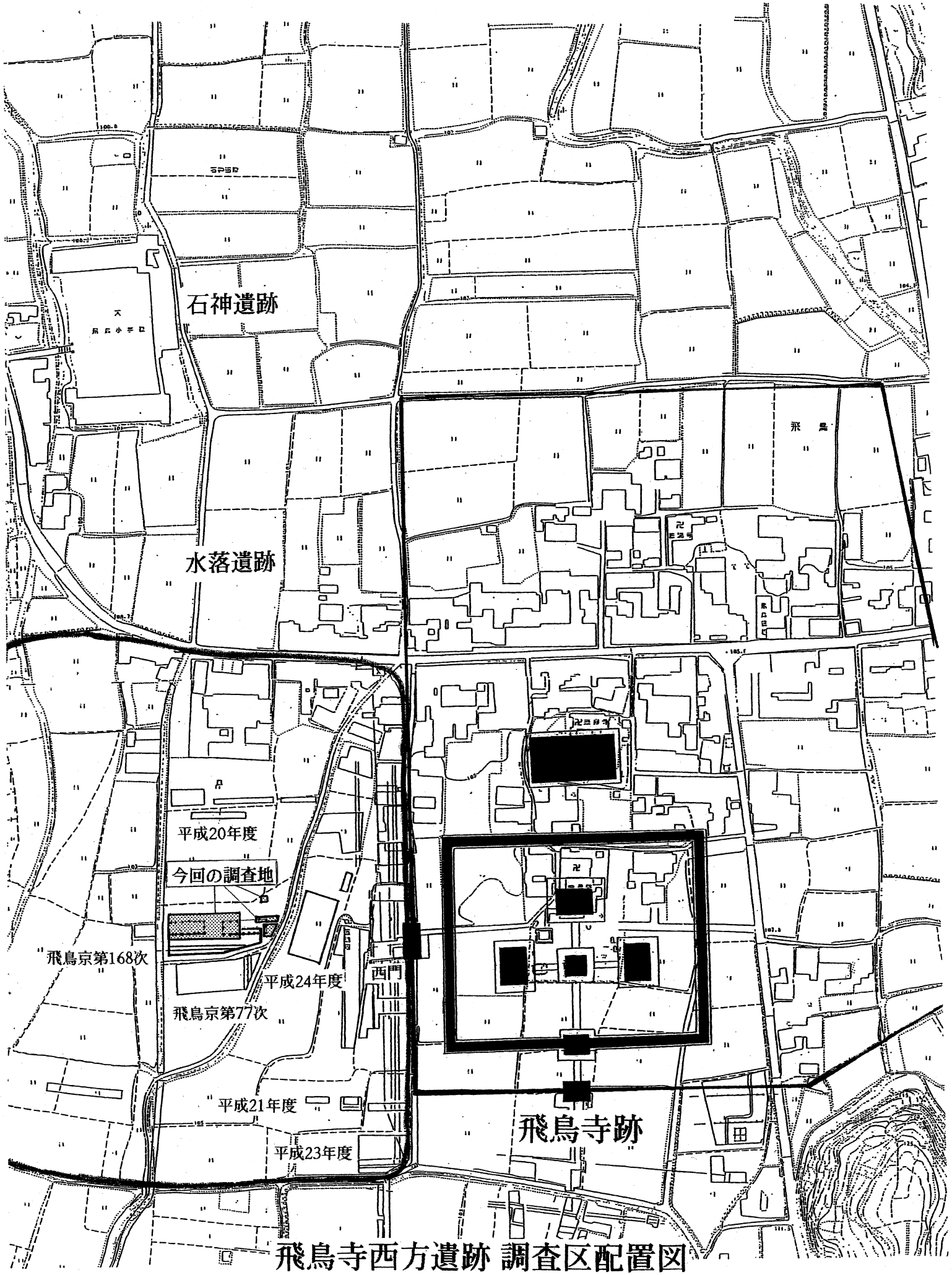
⑦ 天武九年（680）七月甲戌朔
飛鳥寺の西の槻の枝、自ら折れて落つ。

⑧ 天武十年（681）九月庚戌条
多禰島の人等に飛鳥寺の西の河邊（かわべ）に饗し、種種の楽を奏す。

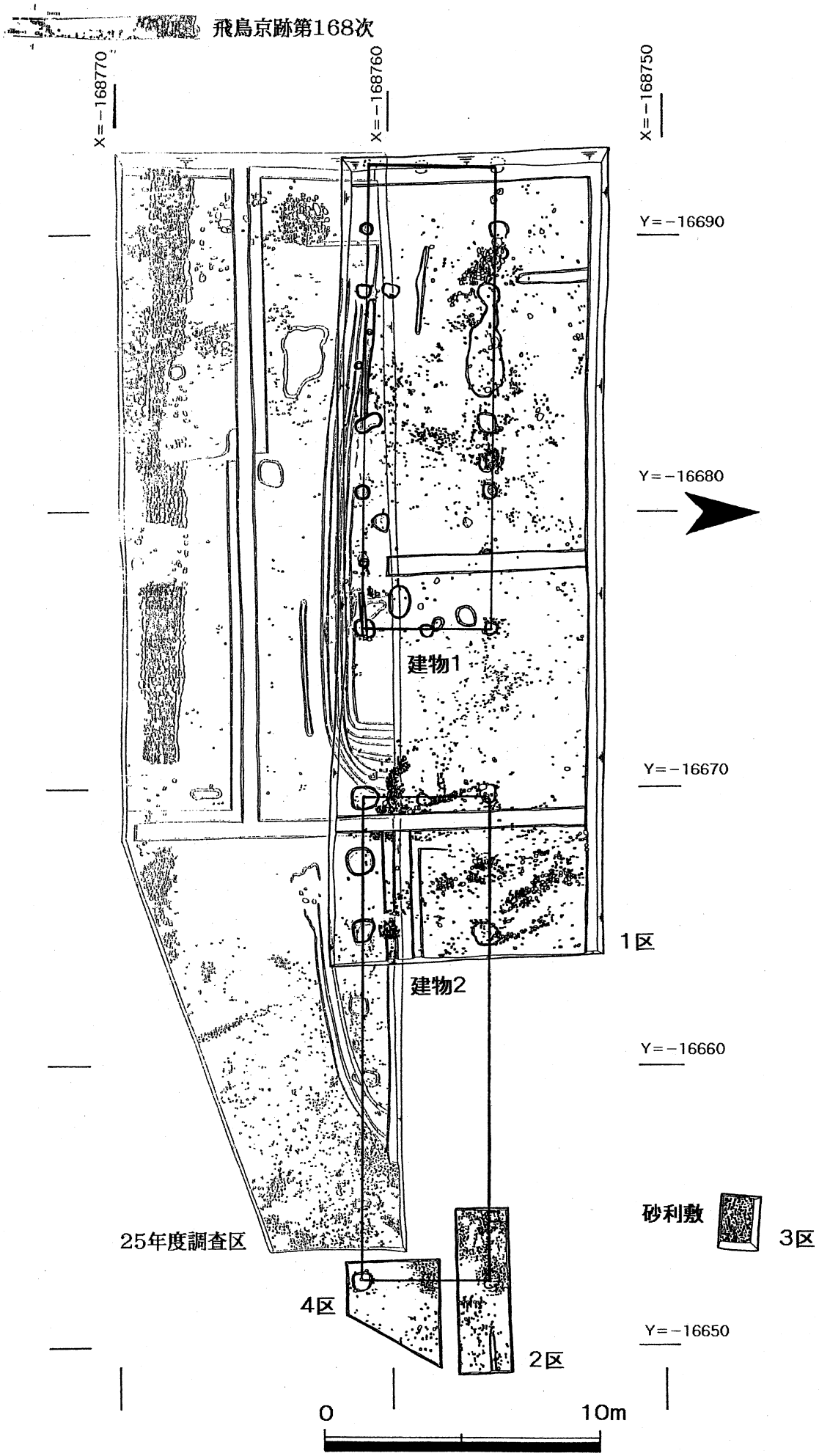
⑨ 天武十一年（682）七月戊午条
隼人等に飛鳥寺の西に饗へたまひ、種種の楽を発す。

⑩ 持統二年（688）十二月丙申条
蝦夷の男女二百一十三人を飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。

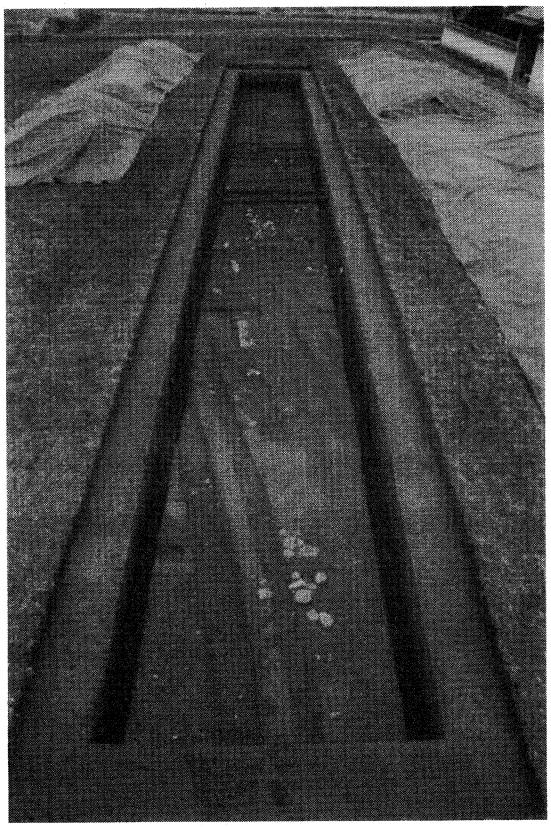
⑪ 持統九年（695）五月丁卯条
隼人（はやと）の相撲を西の槻の下に観したまふ。



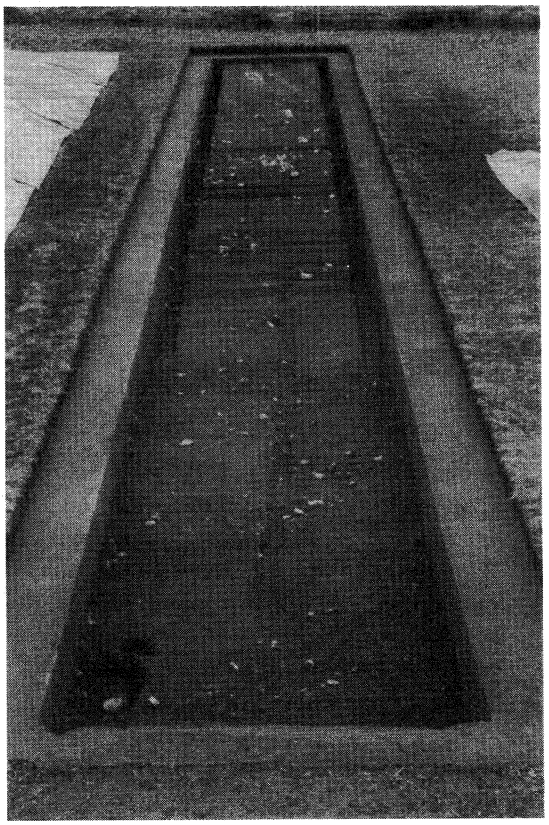
飛鳥寺西方遺跡 調査区配置図


飛鳥京跡第168次
X=−168770
X=−168760
X=−168750
Y=−16690
Y=−16680
Y=−16670
Y=−16660
Y=−16650
建物1
建物2
1区
2区
3区
4区
砂利敷
25年度調査区
0
10m

飛鳥寺西方遺跡遺構図

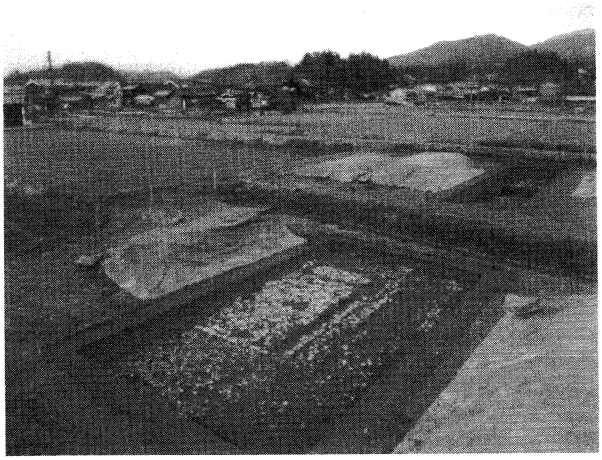


平成２０年度調査（東から）

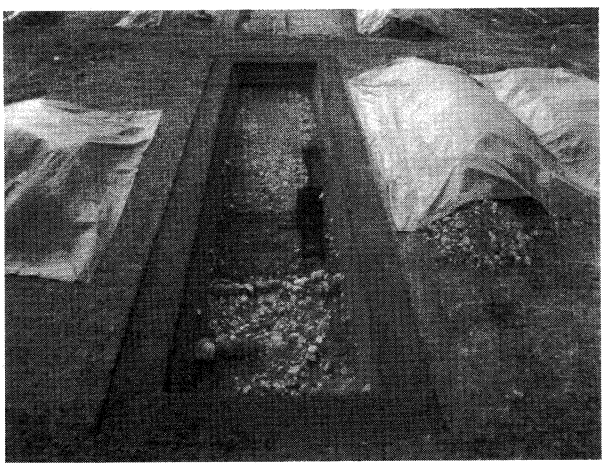


平成２０年度調査（西から）

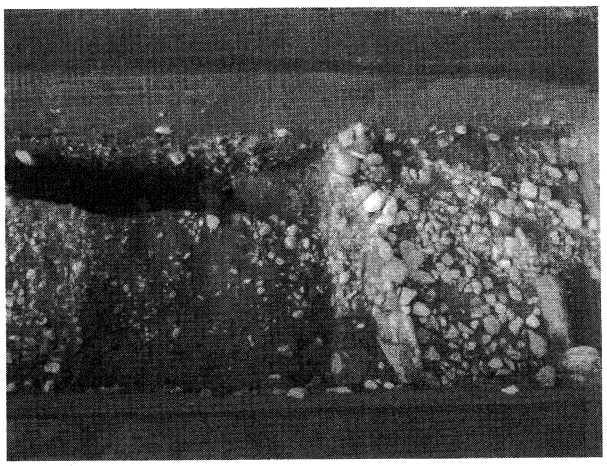
平成２１年度調査　２区（南から）



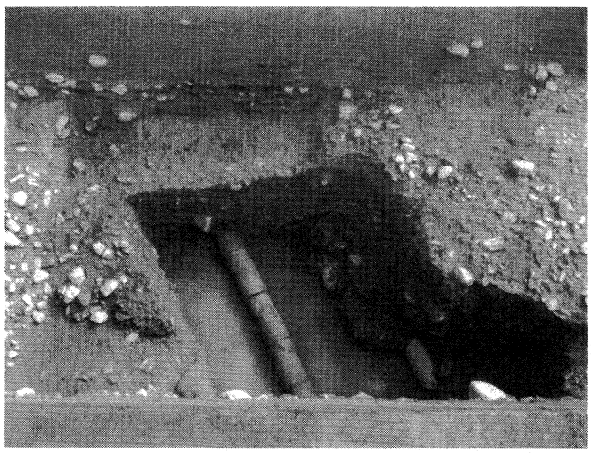
平成２１年度調査　２区（南西から）



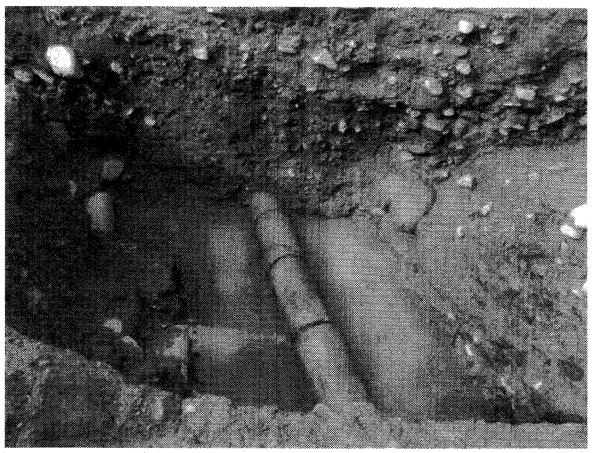
平成２１年度調査　１区（東から）



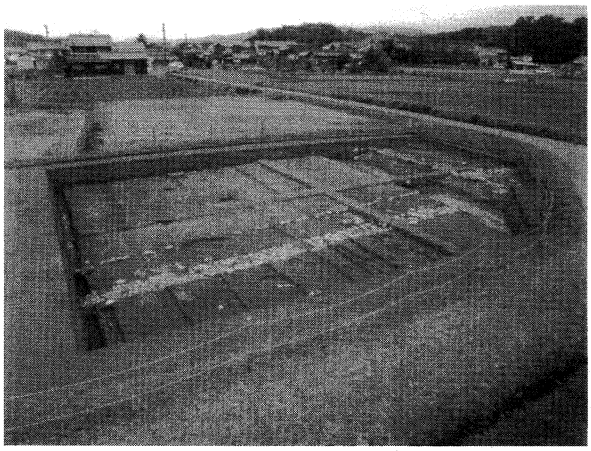
平成２１年度調査　１区　石組溝（南から）



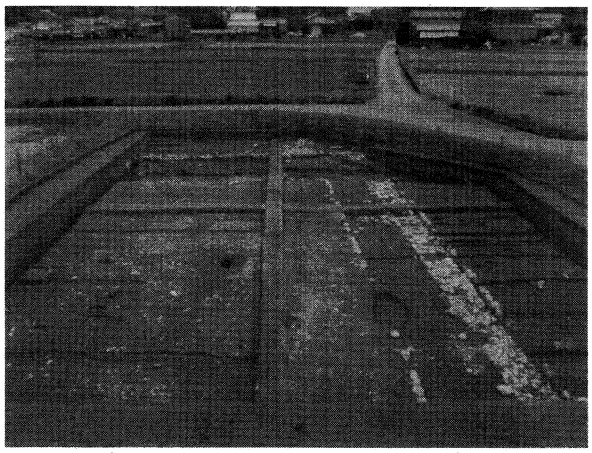
平成２１年度調査　１区　土管暗渠（北から）



平成２１年度調査　１区　土管暗渠（南から）

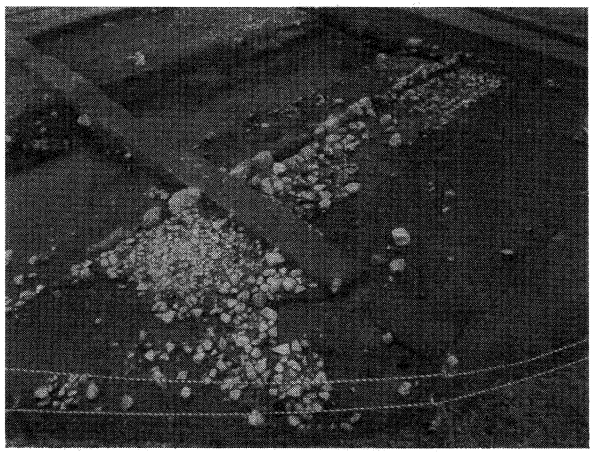


平成２２年度調査　全景（南西から）

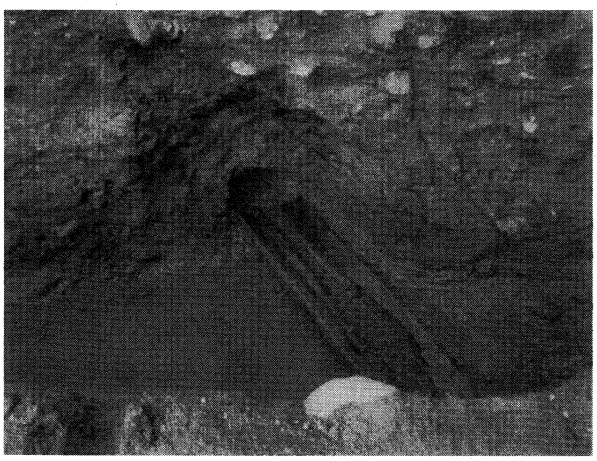


平成２２年度調査　全景（西から）

平成２２年度調査　石組溝と石列（西から）

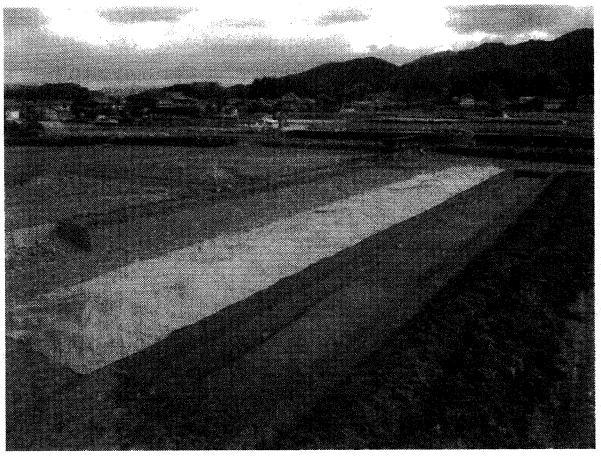


平成２２年度調査　石組溝（南東から）

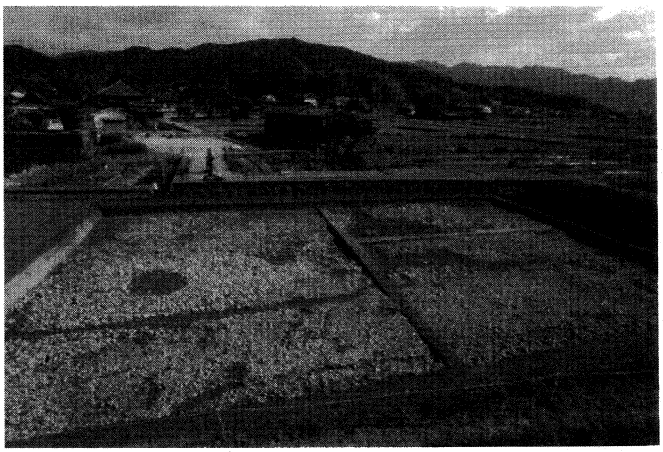


平成２２年度調査　木樋（南から）

平成２２年度調査　転用された天理砂岩

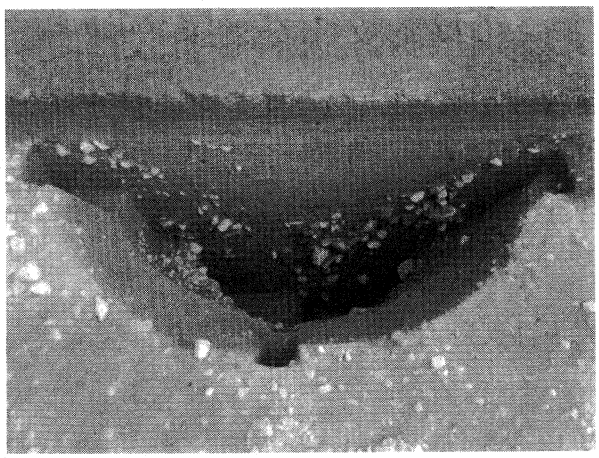


平成２３年度調査（西から）

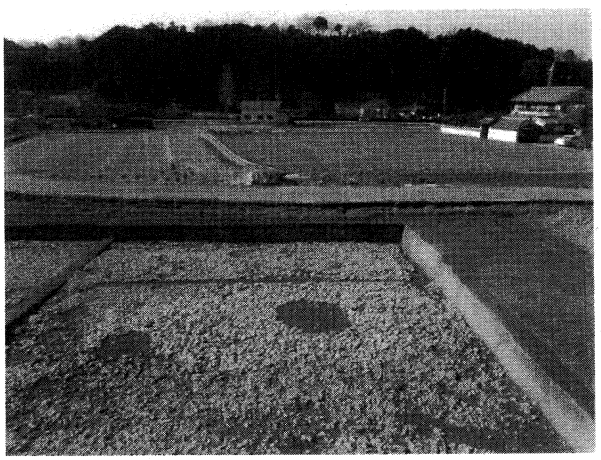


平成２４年度調査　１区　全景（西から）

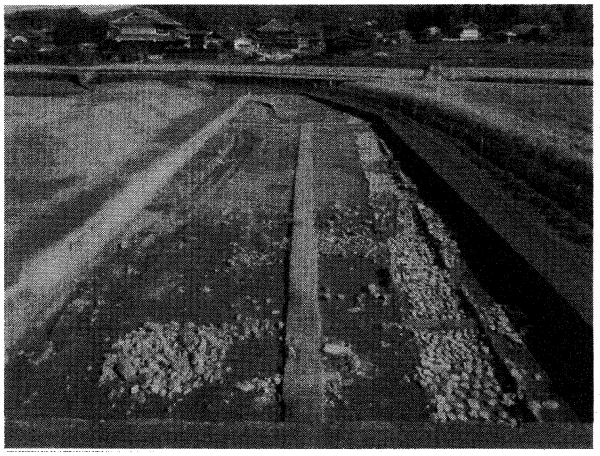
平成２４年度調査　上空写真（右が北）



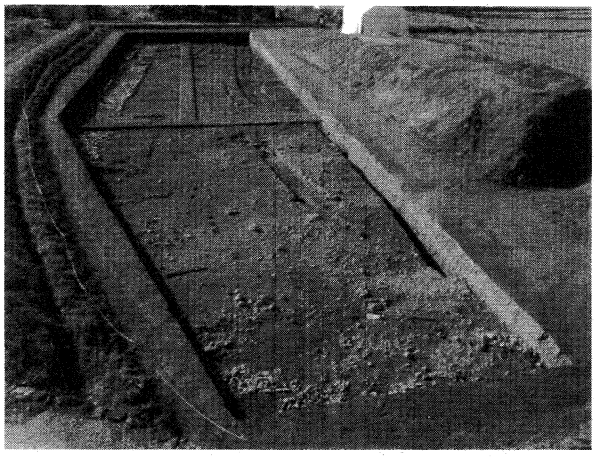
平成２４年度調査　１区　土坑２（西から）



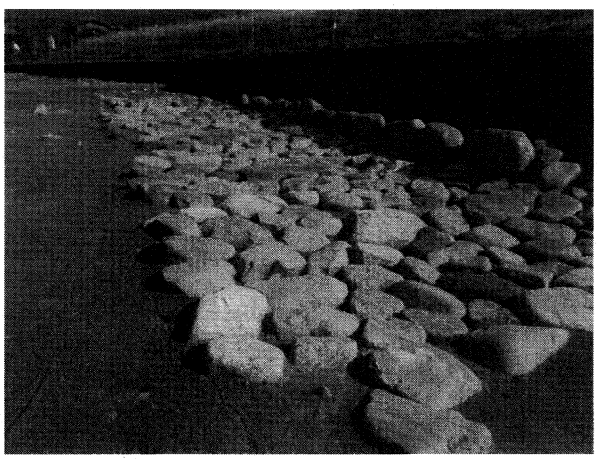
平成２４年度調査　１区　石敷と土坑１（東から）



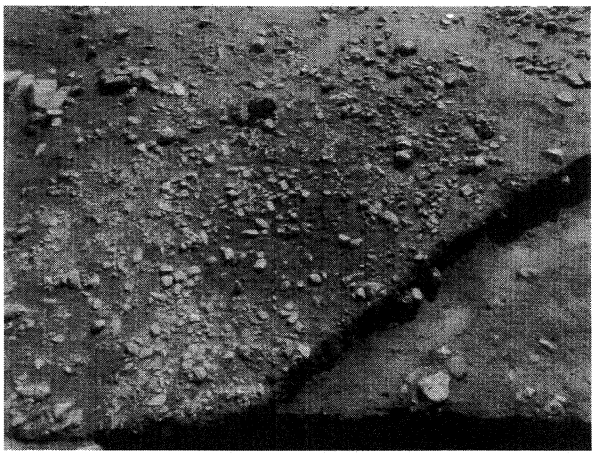
平成２５年度調査　全景（西から）



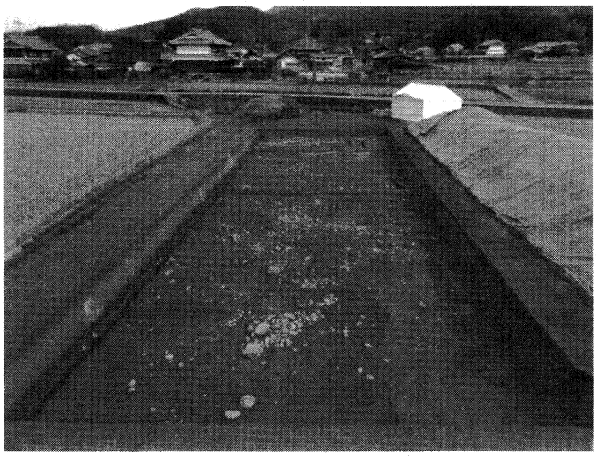
平成２５年度調査　全景（東から）



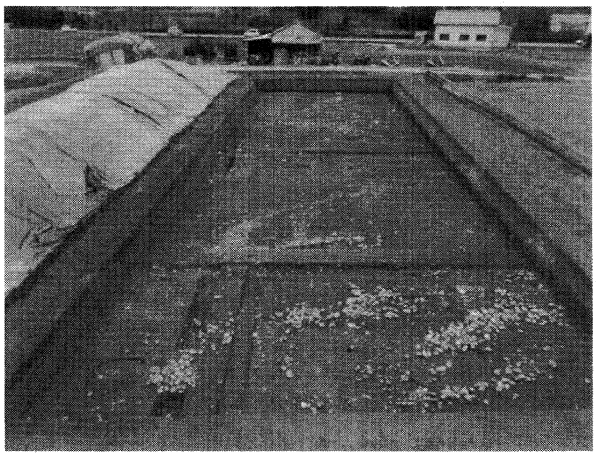
平成２５年度調査　石組溝（西から）



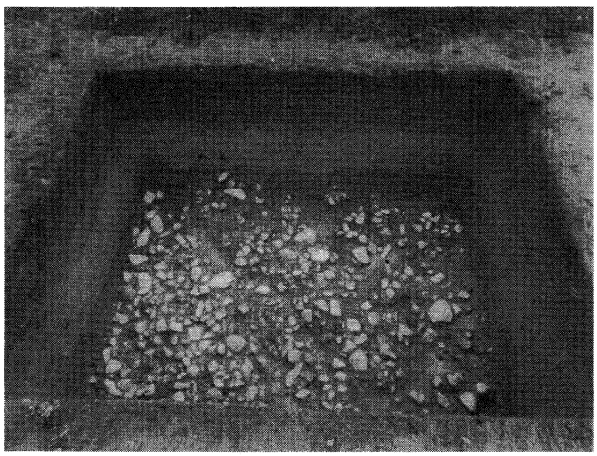
平成２５年度調査　焼土と砂利敷（北から）



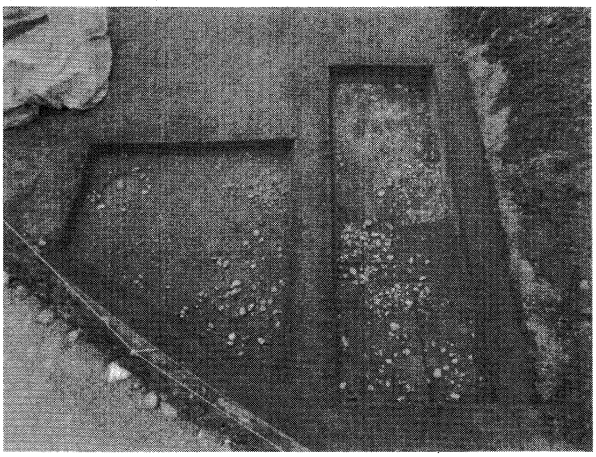
平成２６年度　全景（西から）



平成２６年度　全景　１区（東から）



平成２６年度　３区　（北から）



平成２６年度　２・４区　（東から）

都塚古墳の調査

明日香村教育委員会
関西大学文学部考古学研究室

調 査 地：奈良県高市郡明日香村大字阪田・祝戸
調査原因：範囲確認調査
調査面積：約１５０㎡
調査期間：平成２６年３月～１０月

１．はじめに

都塚古墳は奈良県高市郡明日香村大字阪田小字都塚 640 番地他に所在する後期古墳である。都塚古墳は正月元旦に金鳥が鳴く金鳥伝説があり別名、金鳥塚とも呼ばれている。都塚古墳については江戸時代に刊行された本居宣長の『菅笠日記』の中で被葬者については用明天皇の伝承があったことが紹介されている。また明治時代に入ると石室内に 15～55cm 程度の土砂が堆積しており、石棺内には朱が塗布されていたことが『考古界』で報告されている。大正時代には『奈良縣史蹟勝地調査會報告書　第一回』や『高市郡古墳誌』の中でも都塚古墳は巨石を使用した横穴式石室で石室内に精巧な凝灰岩製の家形石棺の存在が報告されるなど江戸時代から大正時代にかけて、石室や家形石棺についての多くの記録が残されており、早くから注目されていたことがわかる。

都塚古墳の本格的な発掘調査は 1967（昭和 42）年に関西大学文学部考古学研究室(代表網干善教)により発掘調査が行われている。調査の結果、埋葬施設は南西に開口する両袖式の横穴式石室で、玄室内には凝灰岩製の家形石棺と棺台の存在から木棺が追葬されていたことが明かとなった。出土遺物として土師器・須恵器・鉄製品（刀子・鉄鏃・鉄釘・小札）などがある。築造年代については出土遺物などから６世紀後半頃と考えられている。この昭和 42 年の調査では墳丘部の調査は行われておらず、墳形や規模について詳細は不明であった。そこで今回、墳丘の形態や規模の解明に向けた範囲確認調査を関西大学文学部考古学研究室(代表米田文孝)と協同で平成２６年３月から１０月まで実施した。調査面積は約１５０㎡である。

２．検出遺構と出土遺物

今回の調査では墳丘裾部に６ヶ所、墳丘上に４ヶ所の調査区を設けて調査を行った。以下、概要を述べる。

【墳丘と外部施設】

墳丘は南から舌状に伸びる尾根の先端部に位置している。墳丘は礫などから構成された基盤層を整形した方墳で、最下段の法面には川原石が施されている。墳丘については大きく上下に分けることができ、下部は基盤層を整形した基底面でこれより上部は盛り土で構成されている。さらに盛り土の部分は段状を呈しており、側面には石積みが行われている。この段状の石積みは現在５段分確認しているが墳丘最下段のテラス面までさらに数段伸びるものと推定される。段状の石積みは拳大から人頭大の川原石を垂直に２～３段程度積み上げている。高さは約 0.3～0.6mを測り、各段までのテラス面の幅は約１mを測る。このテラス面の下層には拳大から人頭大の石材が充填されている。これは各段の石積みの裏込

めにあたる石塊でどの程度充填されているか厚みは不明であるが石積みを補強する役割があったものと考えられる。この石塊は最終的には上面に化粧土が敷き詰められ、各段のテラス面となっていることから外からは見えない構造となっている。この段状の石積みは石室の主軸に平行している。さらに段状石積みから南へ続く墳丘の南東部分で、段状石積みのコーナー部分を検出している。検出したコーナー部分は三段分あり、残りのよい三段目のコーナーには人頭大の石材を使用しており、東面と南面の石積みと揃うように面をもっている。墳丘の北側の裾部には幅１～1.5m、深さ約 0.4mの周濠がある。周濠の北側法面は人頭大の石材で護岸を行っている。墳丘の規模については墳丘周辺の東西の調査区と北側の調査区で墳丘裾部を検出しており、これをもとに復元すると東西約 41m、南北約 42m、高さは 4.5m以上、西側の見かけ状の高さは７m以上に復元することができる。

【埋葬施設】

埋葬施設は南西に開口する両袖式の横穴式石室である。石室の規模は全長 12.2mで玄室長は 5.3m、幅 2.8m、高さ 3.55mである。羨道長は 6.9m、幅 1.9～2.0m、高さは約２m を測る。玄室の中央には二上山製の凝灰岩を使用したくりぬき式家形石棺が安置されている。石棺の規模は棺身の長さ 2.23m、幅 1.46m、高さ 1.08mで、内法は長さ 1.74m、幅 0.82m、深さ 0.65mを測り、石棺の総高は 1.72mである。玄室内にはバラスが敷かれ、暗渠排水溝が設けられている。

【地震痕跡】

墳丘の北西裾部で地震等による影響と考えられる地割れ痕跡を確認している。地割れ痕跡は長さ４m以上、幅 0.2～0.6m、深さ 0.6m以上で北から北西方向に伸びている。これらは東南海・南海地震の影響が考えられる。

【出土遺物】

土師器・須恵器・瓦器などがある。

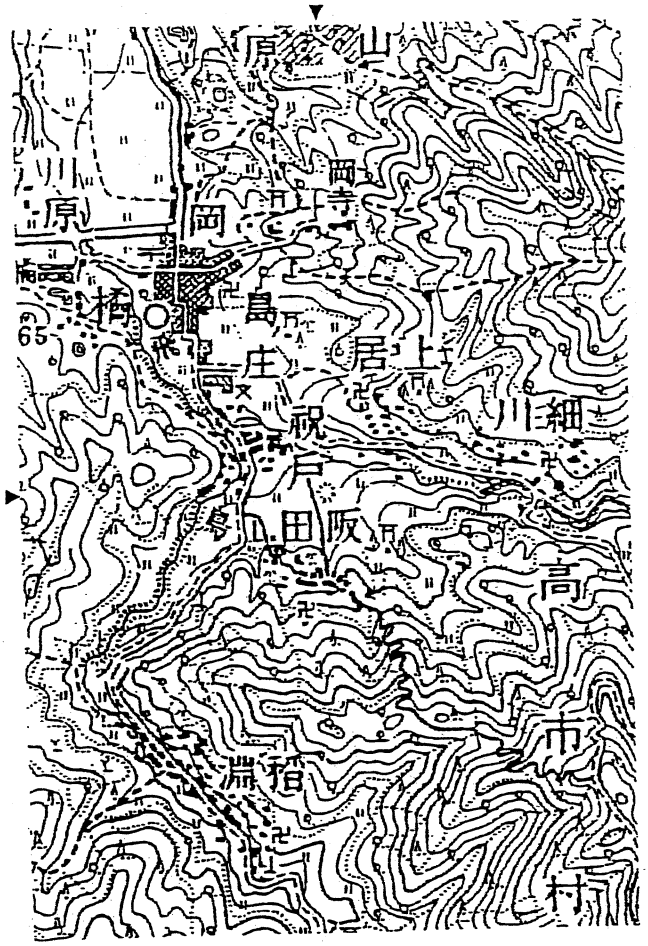
３．まとめ

今回の調査では都塚古墳の規模や構造を明らかにすることができた。今回の調査成果と昭和 42 年の調査成果をまとめると、① 墳丘は南東から伸びる尾根上に位置している。② 墳丘の規模は東西約 41m、南北約 42mの方墳である。③ 墳丘については段状を呈しており、石積みが施されている。④ 段数については現状で６段分確認しているがさらに数段続くものと推定される。⑤ 段状石積みのテラス面下層には拳大から人頭大の石材が充填されており、石積みを補強している。⑥ テラス面下層の石塊の上面には化粧土が敷き詰められており、外からは見えない構造となっている。⑦ コーナー部分の隅石には人頭大の面をもった石材が使用されている。⑧ 段状の石段については北面以外の東西面と南面で確認している。⑨ 埋葬施設については両袖式の横穴式石室で、玄室中央には家形石棺が安置されている。⑩ 築造時期については６世紀後半頃と考えられる。

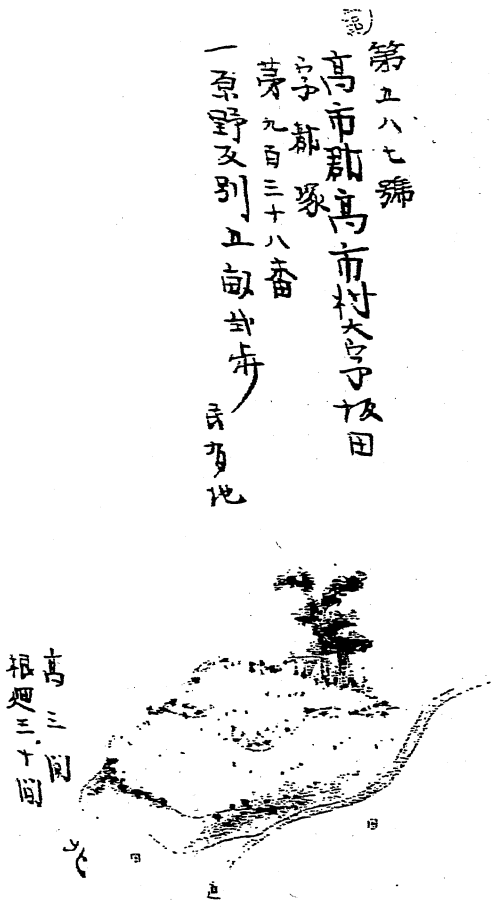
このように、今回の成果は都塚古墳を解明する上で貴重なデータを提供しており、周辺にある石舞台古墳や塚本古墳との関連など飛鳥文化を芽生えさせた飛鳥前史を語る上でも重要な位置をしめるものと考える。

【引用・参考文献】

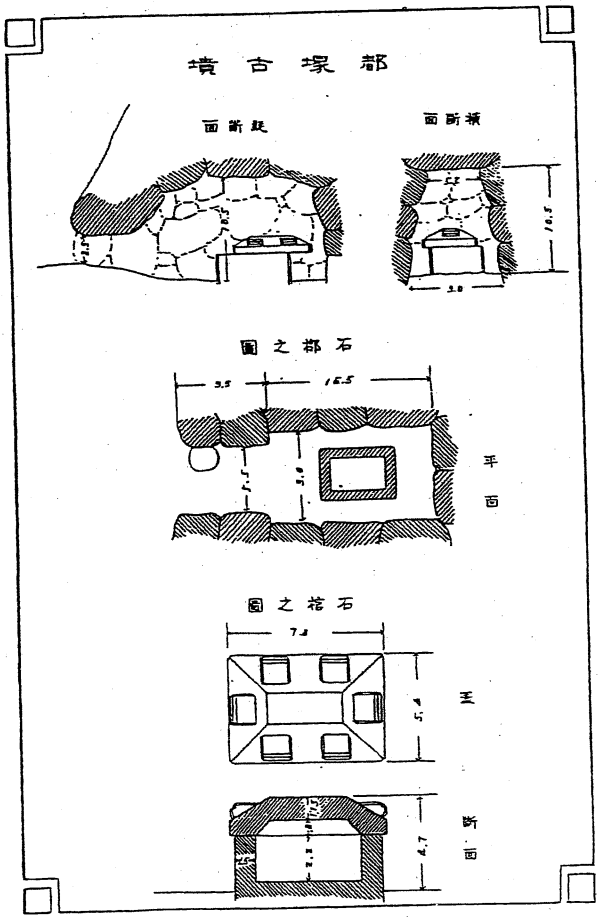
関西大学文学部考古学研究室 1968「奈良県明日香村阪田都塚古墳発掘調査報告」『関西大学考古学研究年報』二



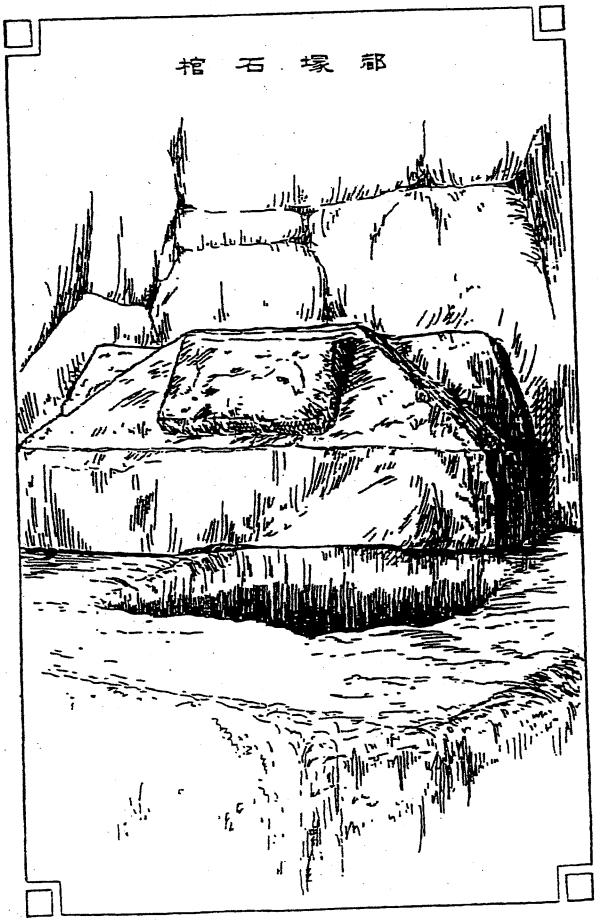
都塚古墳位置図（明治26年）



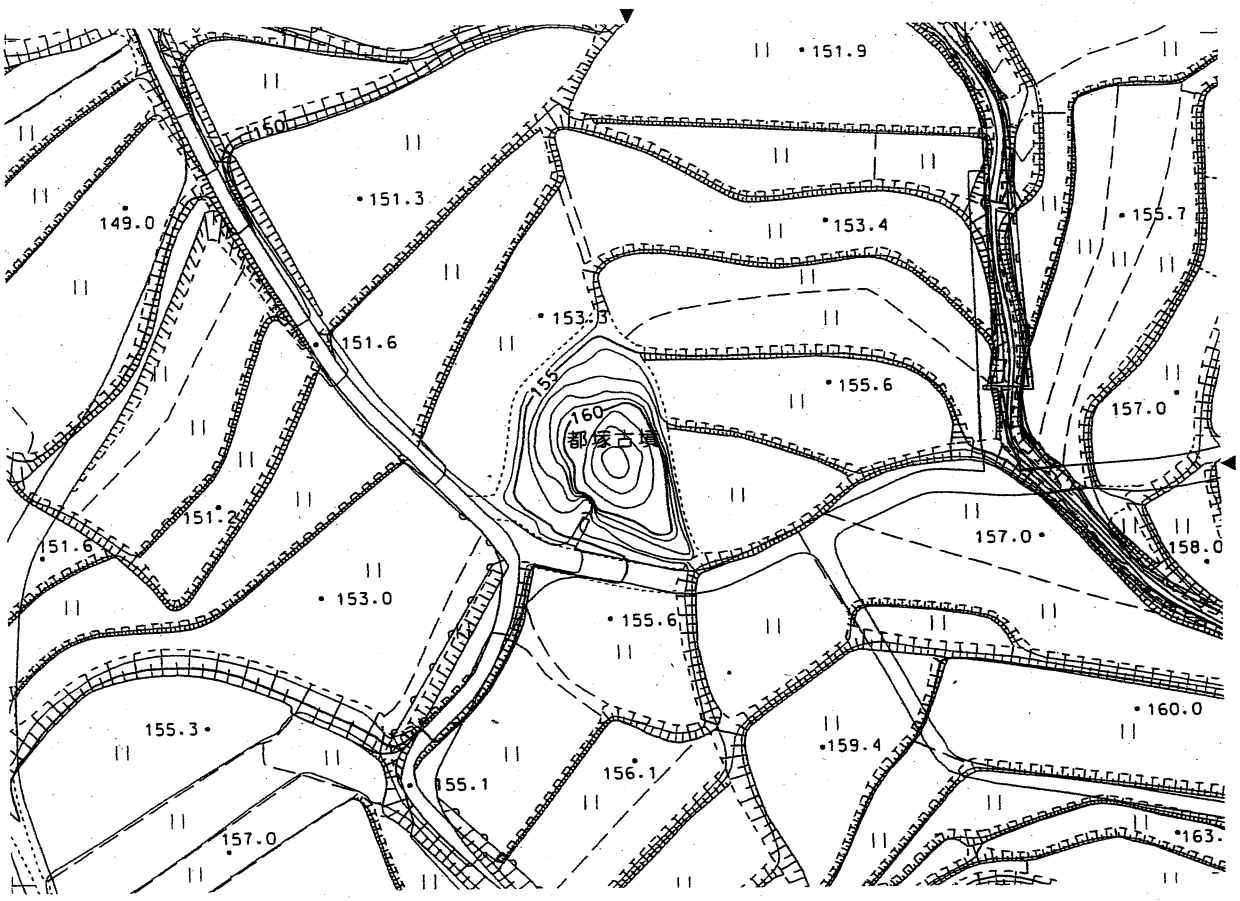
大和國古墳墓取調書（明治26年）



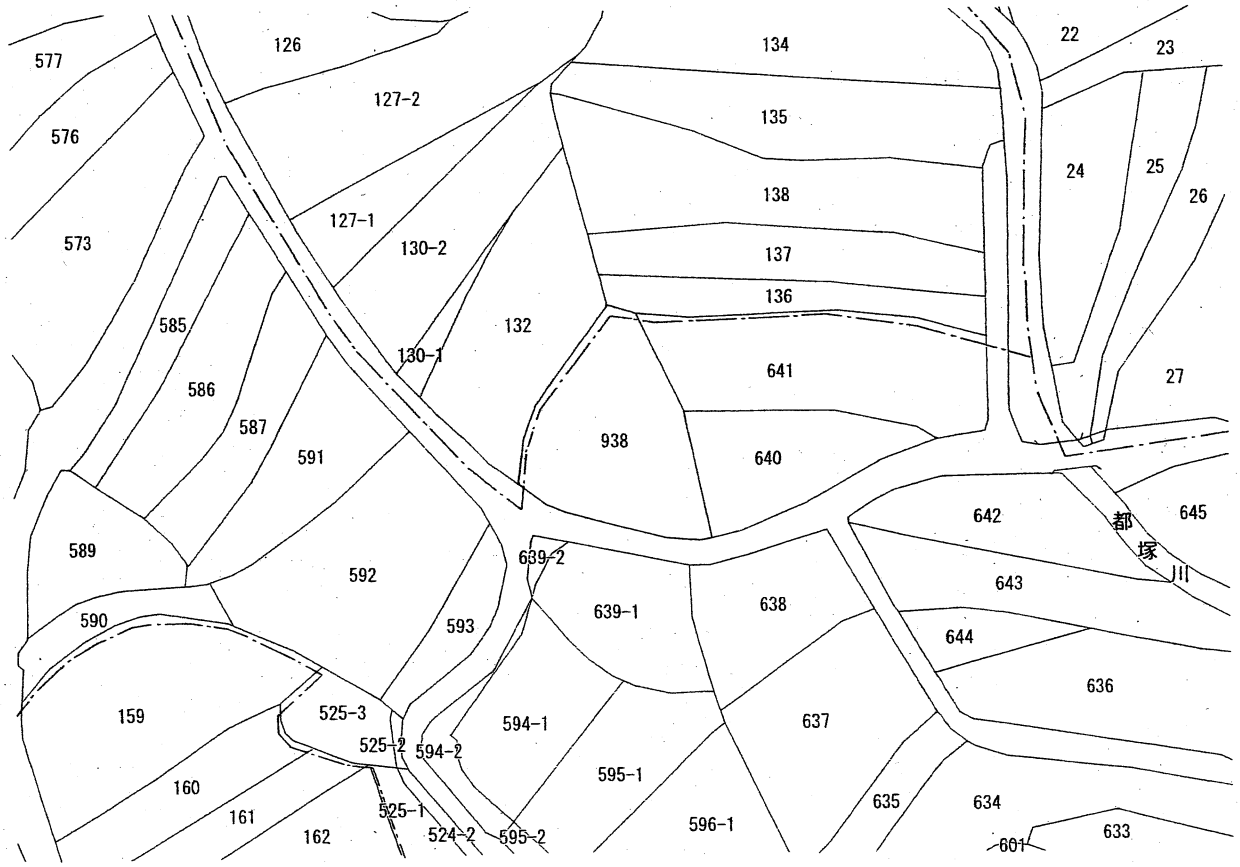
都塚古墳（『高市郡志料』）



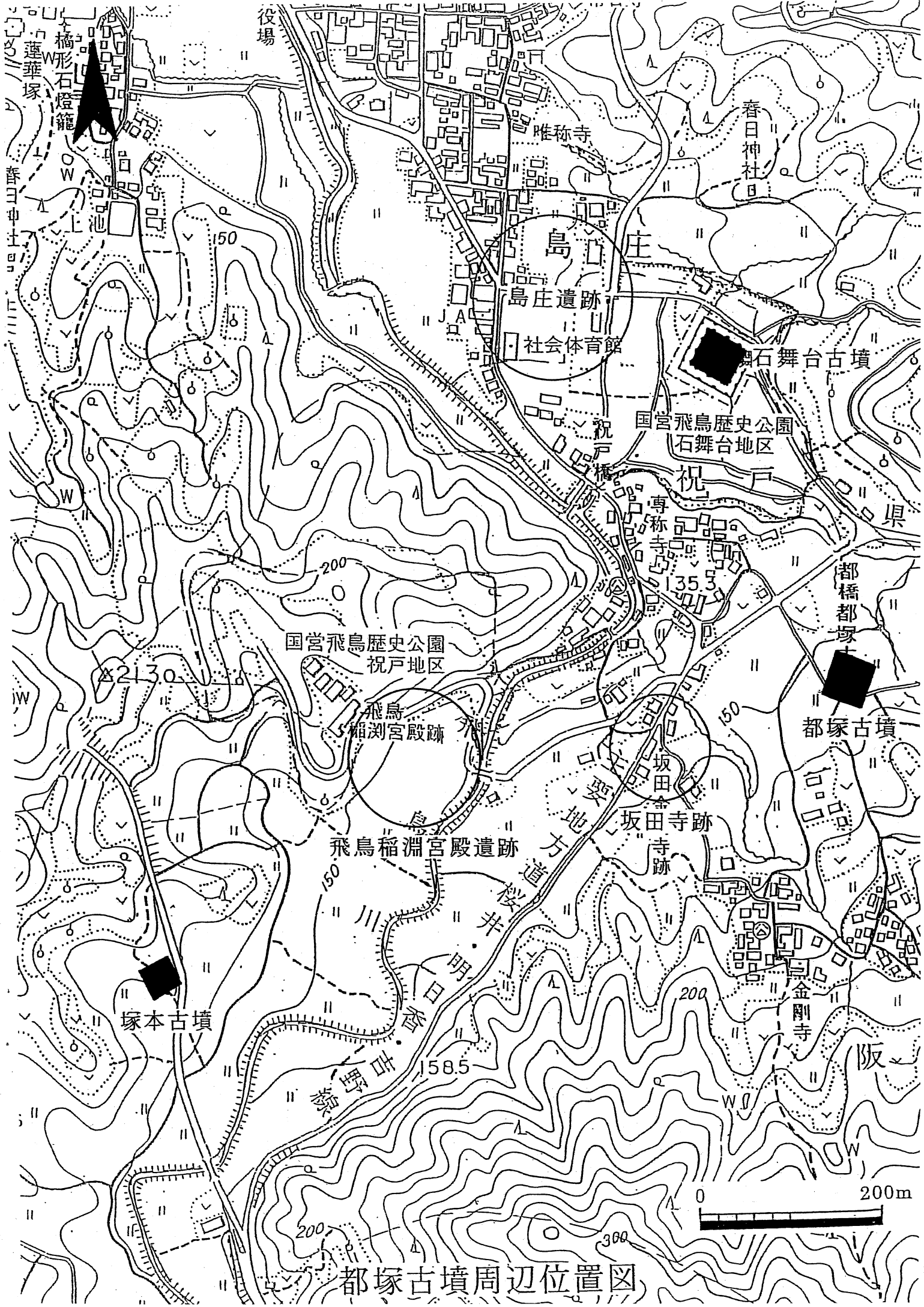
都塚石棺（『高市郡志料』）



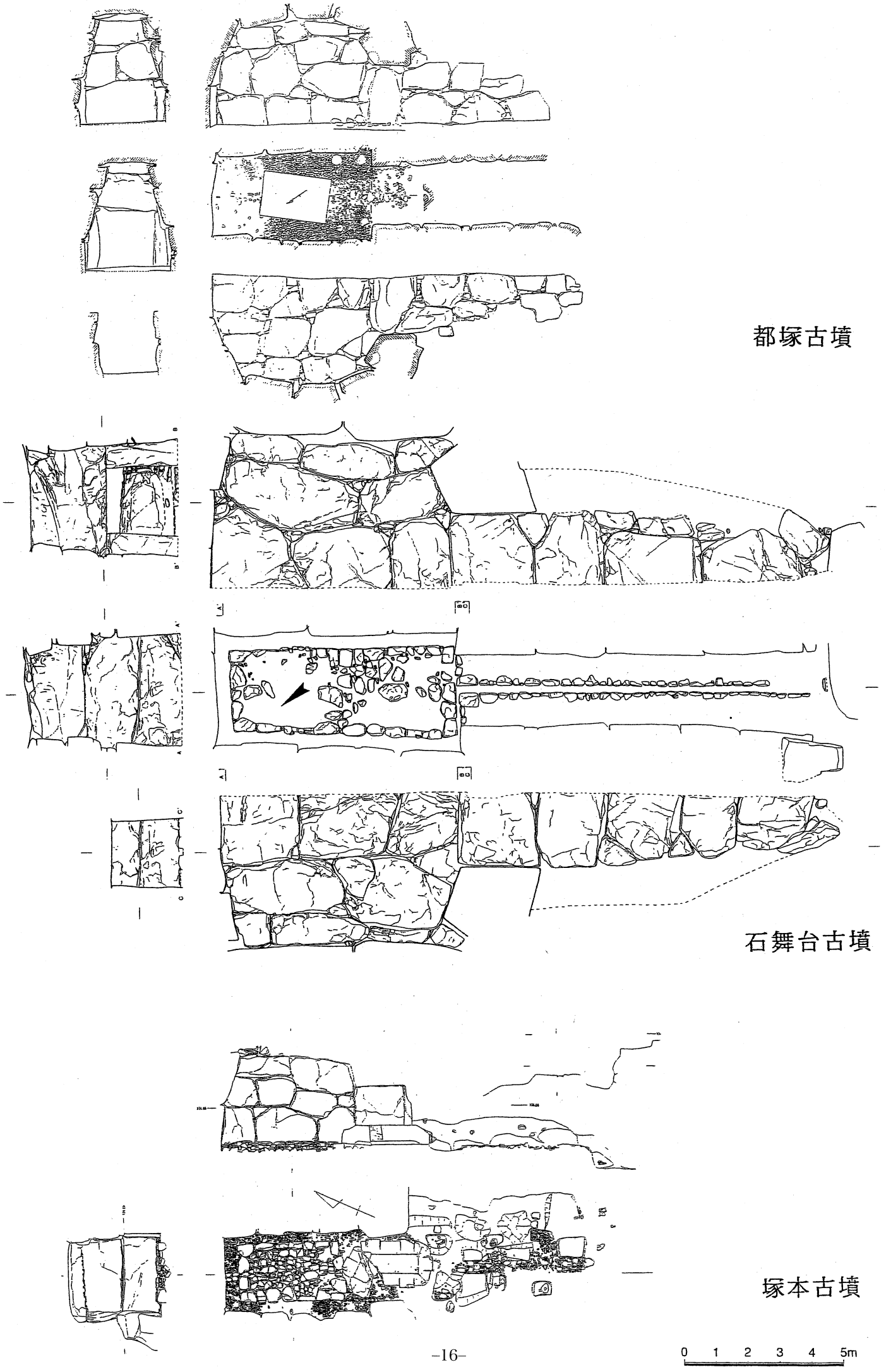
都塚古墳位置図（1：1000）



都塚古墳周辺地籍図

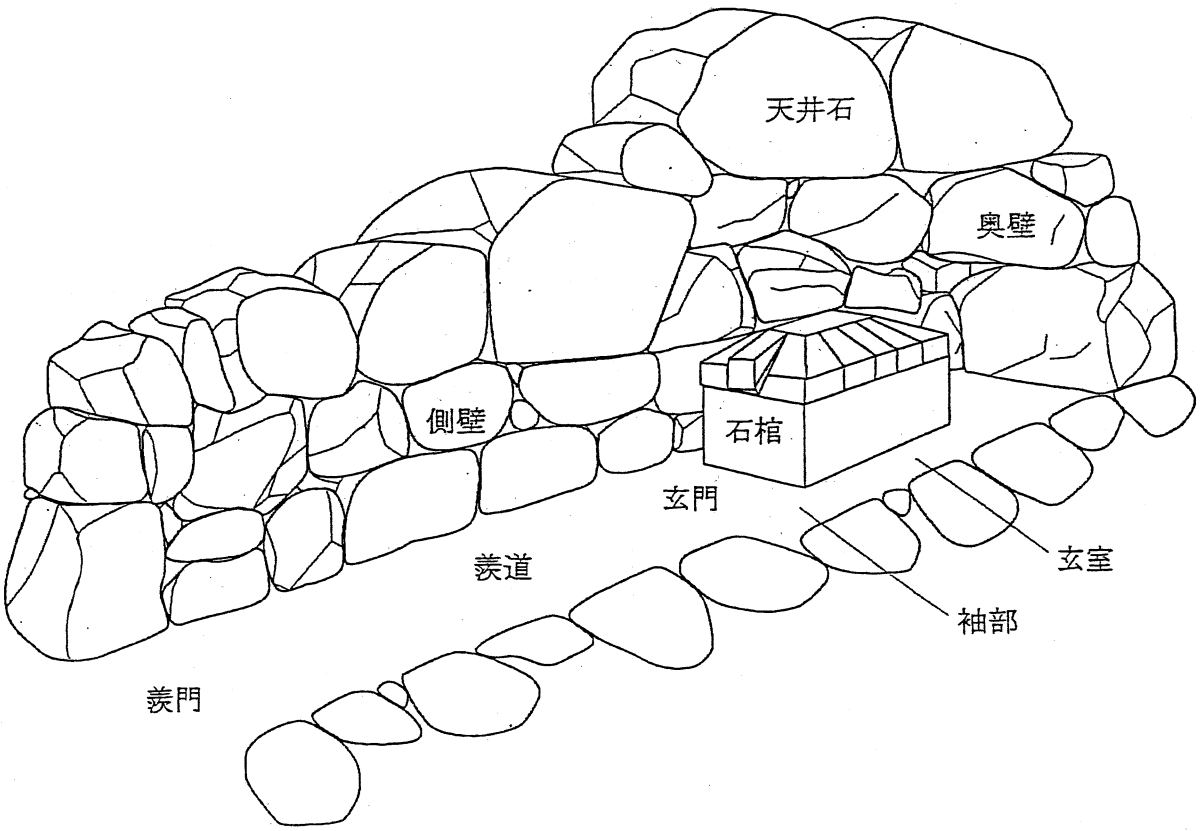

役場
蓮華塚
橘形石燈籠
唯称寺
春日神社
上池
島庄
島庄遺跡
社会体育館
石舞台古墳
国営飛鳥歴史公園
石舞台地区
祝戸橋
祝戸
専称寺
135.3
都橋都塚
都塚古墳
国営飛鳥歴史公園
祝戸地区
213.0
飛鳥
稲渕宮殿跡
飛鳥稲渕宮殿遺跡
坂田
坂田寺跡
寺跡
桜井道
川原寺
明日香
塚本古墳
158.5
金剛寺
阪
0
200m

都塚古墳周辺位置図

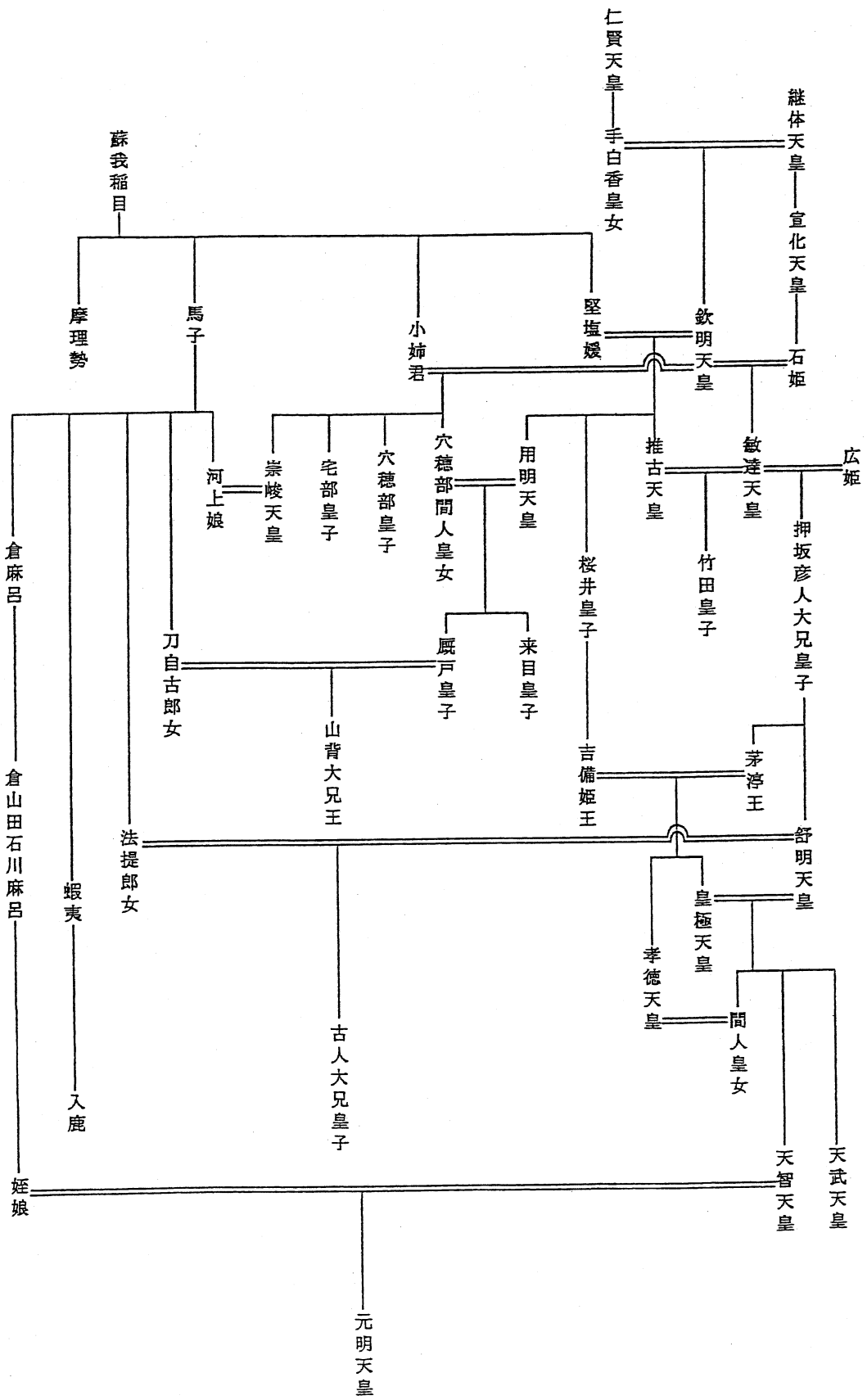

都塚古墳
石舞台古墳
塚本古墳
0 1 2 3 4 5m

方墳の規模と所在地

	古墳名	規模	所在地	備考
1	春日向山古墳	一辺66×60m	大阪府太子町	宮内庁治定　用明天皇陵。
2	山田高塚古墳	一辺66×58m	大阪府太子町	宮内庁治定　推古天皇陵。
3	塚穴古墳	一辺54m	大阪府羽曳野市	宮内庁治定　来目皇子墓。
4	シシヨツカ古墳	一辺60×53m	大阪府河南町	
5	石舞台古墳	一辺50m	奈良県明日香村	蘇我馬子墓か。
6	ハミ塚古墳	一辺48.8×45.6m	奈良県天理市	
7	赤坂天王山古墳	一辺45m	奈良県桜井市	崇峻天皇陵か。
8	都塚古墳	一辺42×41m	奈良県明日香村	
9	岩屋山古墳	一辺40m	奈良県明日香村	
10	塚本古墳	一辺39m	奈良県明日香村	



横穴式石室の各部名称


仁賢天皇
手白香皇女
継体天皇
宣化天皇
蘇我稲目
摩理勢
馬子
小姉君
堅塩媛
欽明天皇
石姫
河上娘
崇峻天皇
宅部皇子
穴穂部皇子
穴穂部間人皇女
用明天皇
桜井皇子
推古天皇
竹田皇子
敏達天皇
広姫
押坂彦人大兄皇子
倉麻呂
刀自古郎女
厩戸皇子
来目皇子
山背大兄王
吉備姫王
茅渟王
倉山田石川麻呂
法提郎女
舒明天皇
蝦夷
皇極天皇
孝徳天皇
間人皇女
古人大兄皇子
入鹿
天智天皇
天武天皇
姪娘
元明天皇

墳丘東南隅　コーナー部分

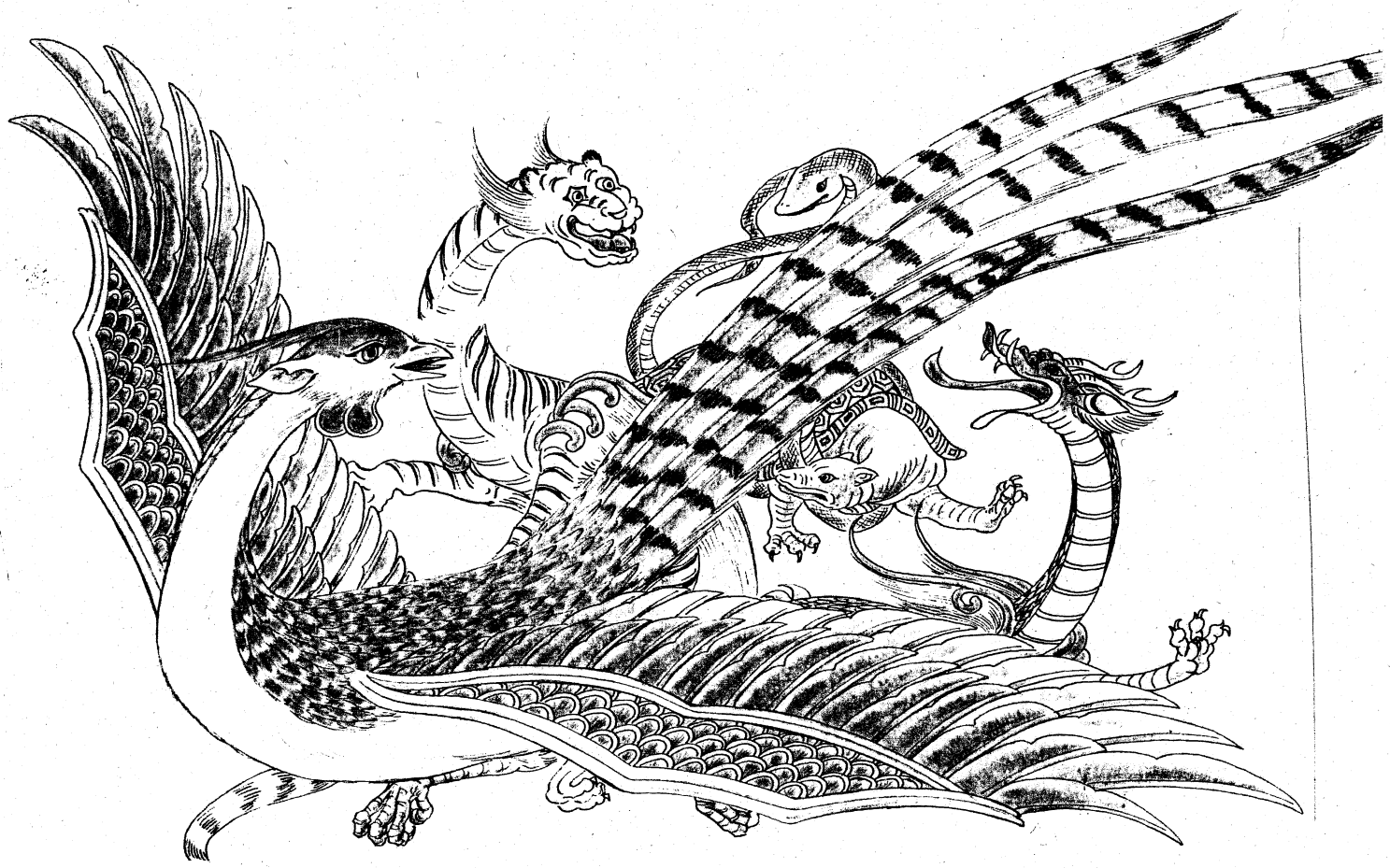
段状石積み　テラス面下層の石塊状況

【メ　モ】

2014（平成 26）年度 明日香村発掘調査報告会

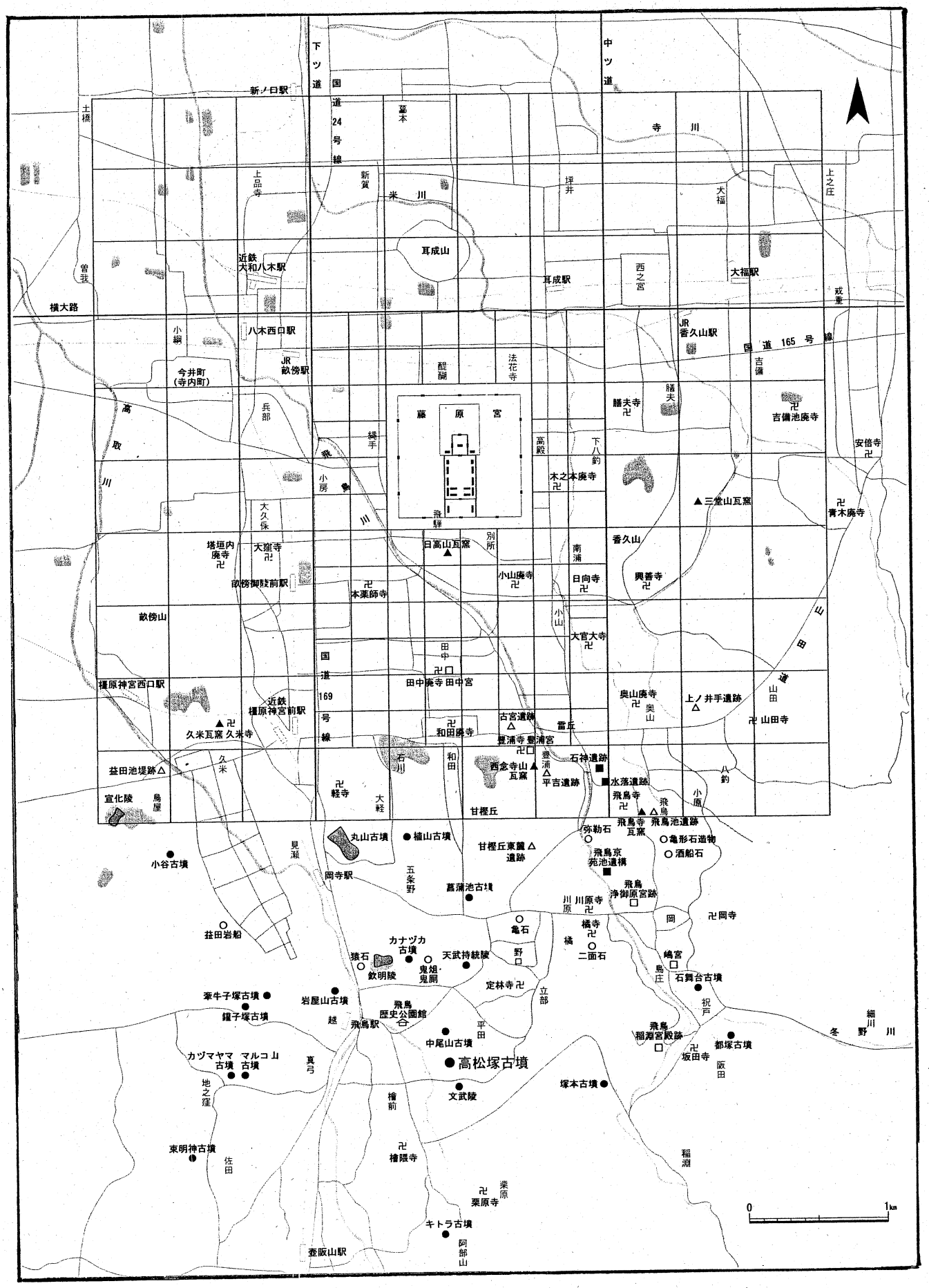
石舞台古墳とその時代

～飛鳥時代前期の歴史的意義～

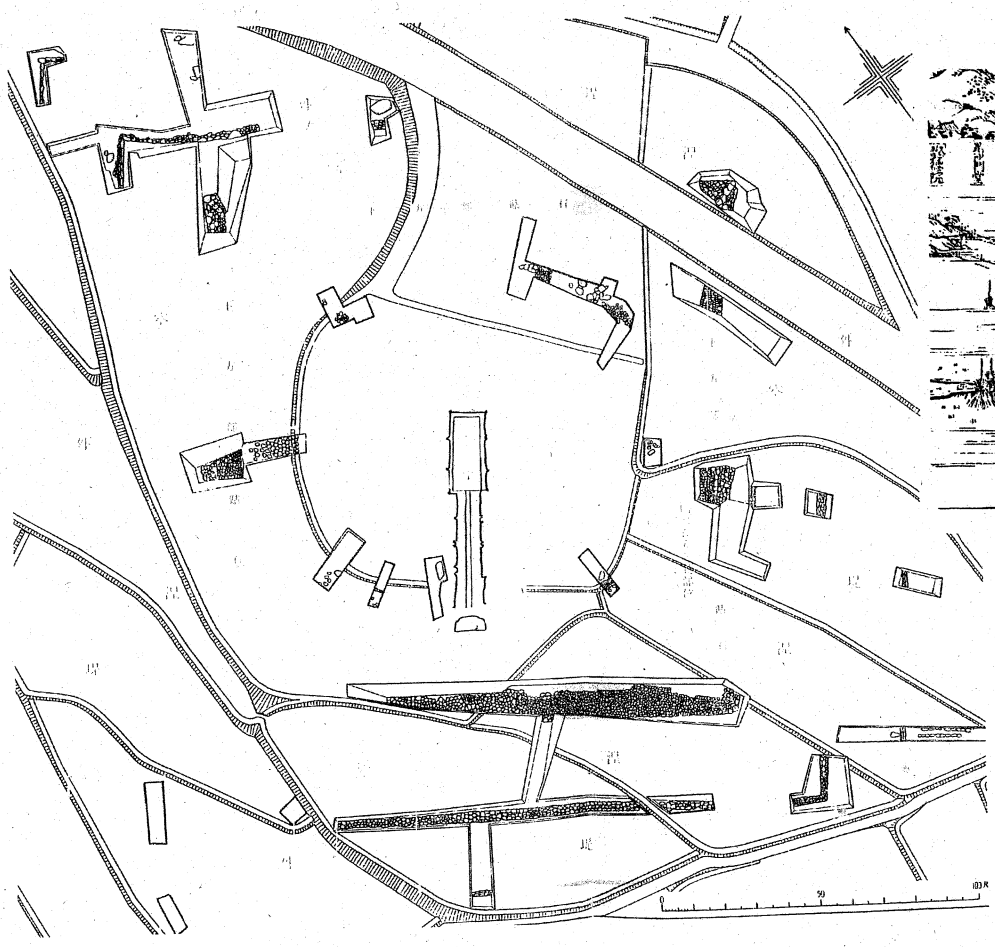


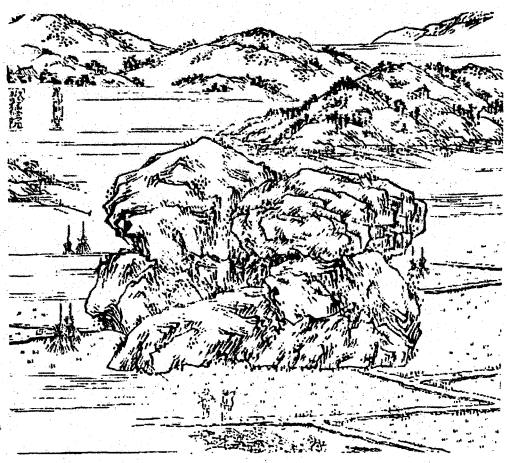
明日香村公民館ホール

2015（平成 27）年 3 月 1 日（日）



第1図 飛鳥・藤原京周辺の遺跡分布図（奈良文化財研究所）



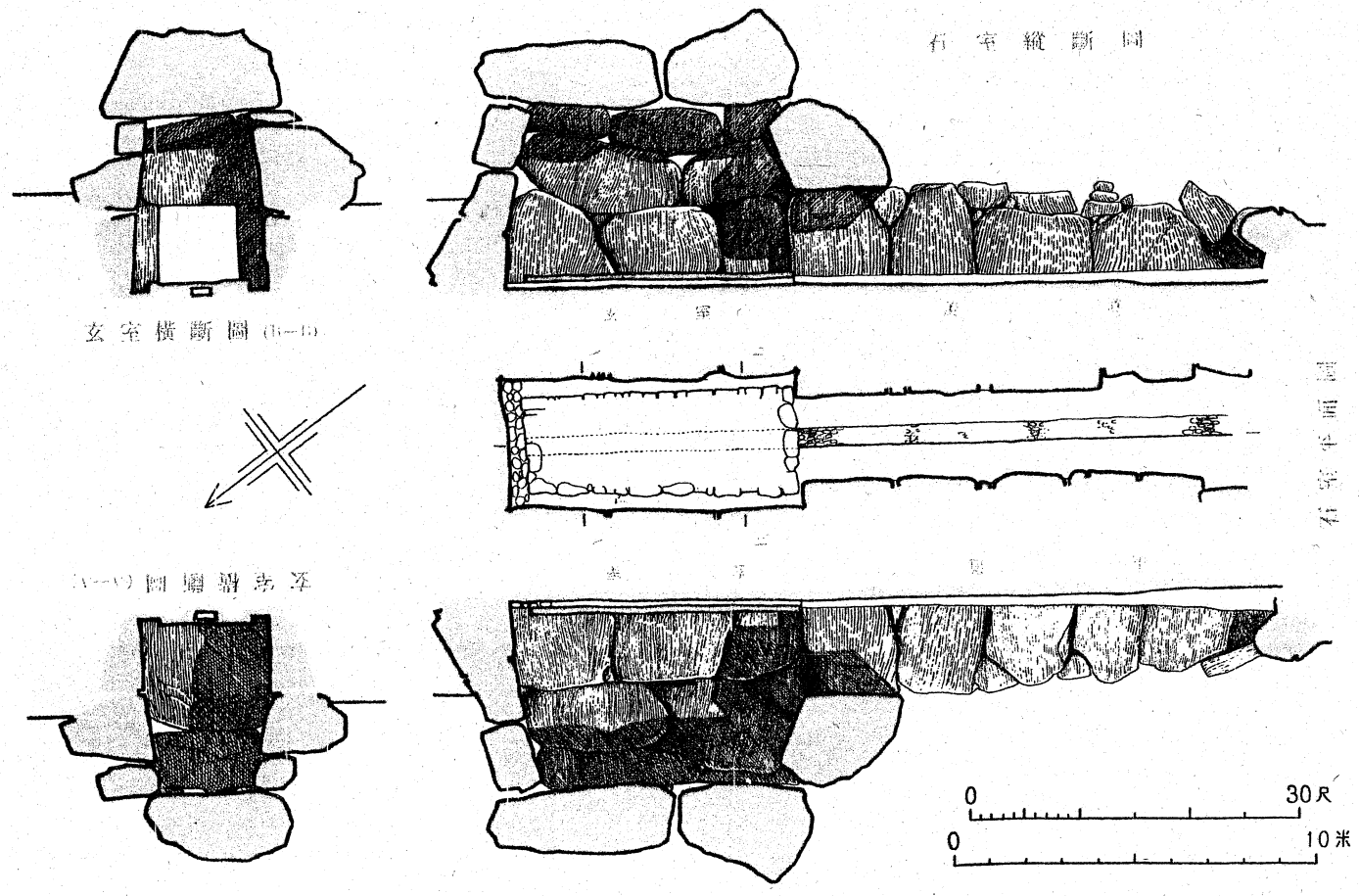


第2図
『西國三十三所名所圖會』
に描かれた石舞台古墳

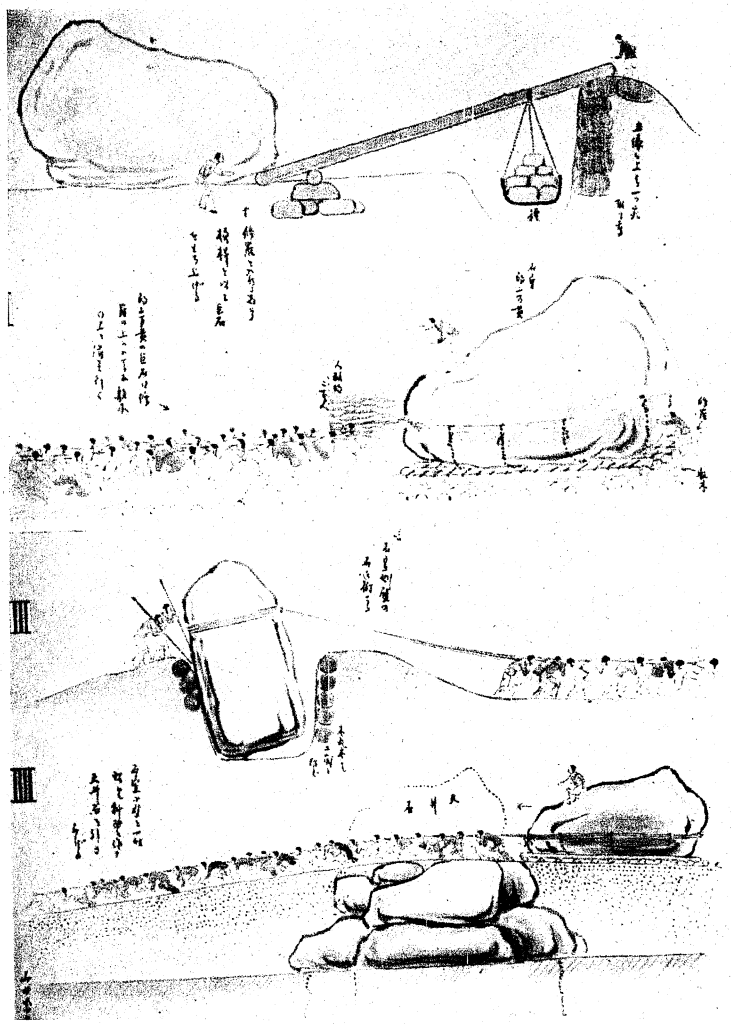
第3図 第一期調査 石舞台古墳発掘区（京大報告）

写真１ 第一期調査時の石舞台古墳発掘区全景（京大報告）

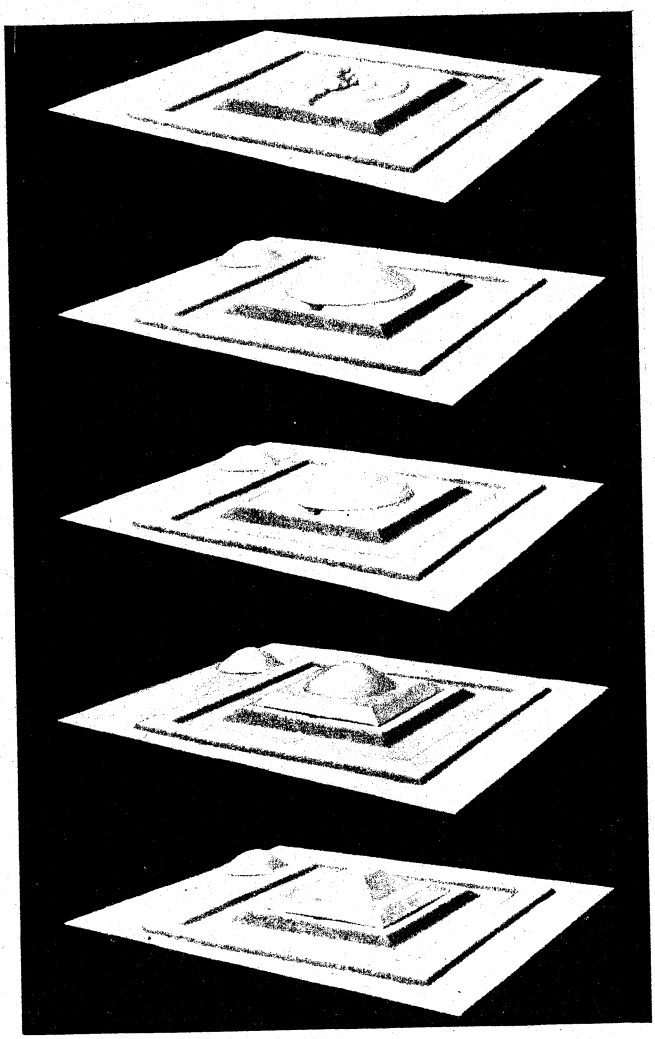
写真２　石舞台古墳第一期調査風景（京大報告ほか）



第4図　石舞台古墳　石室実測図（京大報告）



第5図　石舞台古墳の巨石運搬・石室築造法（京大報告）



第6図　石舞台古墳　墳丘形態復原案（京大報告）

昭和8年11月5日号

謎はとけるか
大和の"石舞台"
けふから大掛りな發掘

世界的巨石古墳で知られる奈良縣高市郡高市村「島之庄石舞台」は古代におけるその獨特な構造様式や墓造時代など久しく學界の謎として殘されてゐたが、こんど我國考古學界の權威京大教授濱田耕作博士が主査となり、京大考古學研究室と奈良縣史蹟調査會が合同で同古墳の發掘大調査を行ふことになり、今五日午後二時半現場で盛大な就行、引續き今後約一ヶ月間の發掘で富の濱田博士はじめ同大學教授數名、末永雅雄氏同大學生および奈良縣史蹟調査會の岸熊吉、稔森、中田兩氏らが學界の注視を集めつゝ全貌を解明、古代文化の謎を探究することになつた

同古墳は飛鳥地方にあり羨道の長さ四十五尺、幅六尺、玄室の長さ卅六尺、幅十二尺、現在封土が現はれて玄室が地表に露出し、その天井石一つの大きさだけでも長さ十七尺、幅十五尺、厚さ七尺、重量約二百トンといふ規模の巨大なもので文化の開けぬ古墳中未類の一にこれらの巨石をどうして動かしたかを探はせるものである(奈良)＝寫眞は石舞台の露出した部分

昭和8年11月20日号

小春日和に賑ふ
大和の石舞台發掘現場

……飛鳥文化の玉手箱開きもいよいよ正午過へ——十九日の日曜は快晴に恵まれて奈良縣高市郡高市村島ノ庄石舞台の玄室開掘の大石柱に見惚すべく午前七時からシャベルと鍬の音高く掘り進んだ

……十九日までの發掘工程の總收穫は土器片約五百を數し主として飛鳥式土器で稀れに須恵式土器をまじへ完全な人頭大の壺、埴輪、圓筒の破片なども發見されたが、中にも人頭大の壺はこのモンスター古墳の性格究明に好個の資料を提供するものとみられてゐる

……正午過ひとしきり一段落すべく作業は現場を休め、ごとに發掘作業は現場を休め、土に、末永、濱田、岡崎三學士の指揮の下に進められ十九日も遂に夜の帳は降るまで続いて十九日も遂に夜の帳は降るまで徐型の大石柱によれる最初の鍬の音はきくことが出來なかつた、もつとも發掘終了間際に玄室内から石棺合間鍬と同時代と覺しい鐵片一個を發見したが、これは從來の發掘物よりも一歩進んだ貴重な資料である

……一方石舞台から約三町餘を隔てた同村上居多武峰街道改修地の現場からまた古墳の一角が出現、下にかけて大したものではなかつたが珍らしい壺女古墳らしい形跡顯然たるものがあるので恩はぬ貴重な副收穫に調査班では狂喜し直ちに指導者の一人京大考古學助教授は午前十時現地を見び同助教授は午前十時現地にいたり調査した

……昨日の日曜の一日を國都飛鳥を秘める石柱探掘に熱中した考古學ファンの群は大阪堺市の考古學有志會連中學生をはじめ女學生、高等學校、中學生、女工など數千人にのぼり飛鳥居合店まで出るといふ大賑ひだつた

……飛鳥驛發表は驚る

今日までの發掘調査でもいよ〳〵段の石舞台の現場の社交ごとが確認されて來ました、これを外國流のドルメンと同じ系統にいれるとすれば一説また印度、中央アジアの各地を探しても我々の知る範圍ではこれに匹敵するものはありません、世界一のドルメンと云めても過言ではないでせうと思はれて來ました、上居ら見は遠方古墳らしいが、もう少し調べないとはつきりしたことはいへません大阪朝日(上)石柱の裏にあと一息(下)快晴と日曜に見物人列をなす

昭和8年11月13日号

古墳形式研究に新しい謎を投ず
開始以來快晴に恵まれた大和の石舞台發掘

日本考古學界の最大事業として注視されてゐる奈良縣高市郡高市村島之庄、石舞台發掘は開始以來好晴にめぐまれて大いに進捗し十三日よりいよ〳〵謎の中心古墳玄室の内部發掘に着手することになり問題の石柱もその全貌を現はすことになつたが十二日玄室と羨道の境目が巻大の小石をもつて詰めてあるとと羨道の内部に一尺角くらゐの石を數十個發見したがこれは古墳としての形式から全然はなれたもので特に小石が玄室を封じてゐる點は人爲的と見られ新らしい謎を投げてゐる、右につき京大の末永雅雄氏は語る

古墳羨道の最初から玄室と羨道との境界を小石で詰めたとすれば頗る形式が異つてゐる、また後年古墳を發掘したときに行れたとすればなんの目的でしたか疑問が生じてくるとになるとにかくこれは珍らしい形式で研究の餘地が十分あると思つてゐる

埴輪圓筒の破片を發見

十二日午後三時ごろ羨道中央部の地下八尺から埴輪圓筒の破片を發見したが右破片の發所が羨道の底部と見られるのでこれから推定すると羨道の長さは約八尺であることがわかつた(大和高田)

昭和8年11月27日号

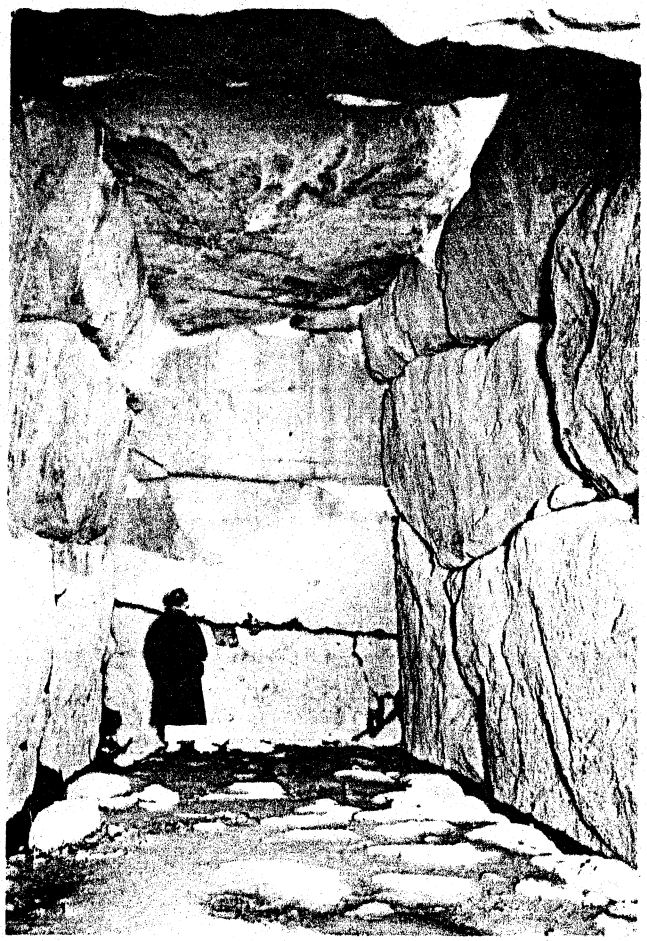
考古學界に興味を投かけた二面石
石舞台發掘の副産物！
グロな男女の面相を彫刻

大和島ノ庄石舞台發掘の副産物として大和高市郡橘寺本堂の南麓にある二面石が新らしく考古學界に登出することになつた、橘寺の二面石とは高さ四尺、周圍十尺の石にグロテスクな二面の男女の面相を彫り男女の相貌を彫出した珍らしい石塊面を發掘し某所に安置する旨を明記してゐるが、これはその一つでこれと殆と同一の石が高取町高取城址に埋れてゐることが判つた、濱田博士はこれを奈良朝時代における民族の信仰的偶像物であらうと考證してゐるが、さらに橘寺にあるほかのものは男女の姿表に彫出したもので顔の面貌が一尺五、六寸あり、一方が柔和に他方が憤怒の形相を現はしてゐるところが不思議なことにはこの柔和な方が男子で憤怒の方が女性をシンボルしたものだといはれてゐる、最近京大の考古學教室濱田耕作博士がこれを發見、非常な興味を持ち京大研究室助手梅原末治氏をしてこの研究に當らしめることになつたが「名所圖會」によると大和平田山(高市郡畝傍町平田)かロチックなところまで表現されてゐるもので、また女性の相貌の表ろしくした點は崇敬の聖兎に女を彫刻した結果であらうといはれてゐる、右につき濱田博士は語る

實に不思議な石です、日本で作つたか支那渡りから渡つて來たかは不明ですが、彫刻に表はれた男女の貌は大陸的で支那の泥像傾に似てゐます、多分信仰的に作つたものらしいですが、グロ味を帶びてゐる點が面白いと思ひます(大和高田)

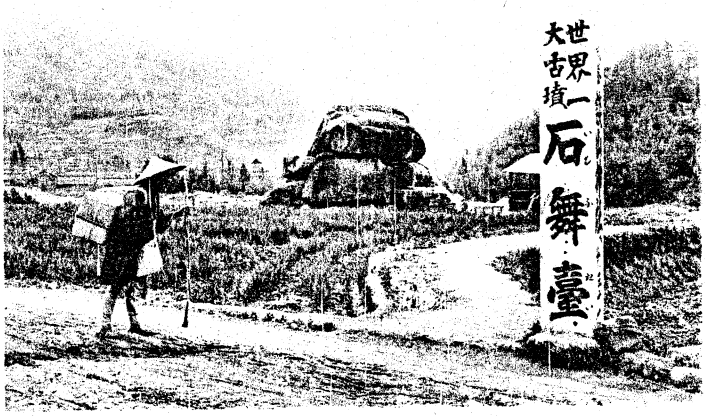
第7図　第一期調査関連　新聞報道（大阪朝日新聞）

指定史蹟・大和國・島之庄・石舞臺古墳　全景



（室　玄）部　内　室　石　墳古臺舞石・庄之島・國和大・蹟史定指

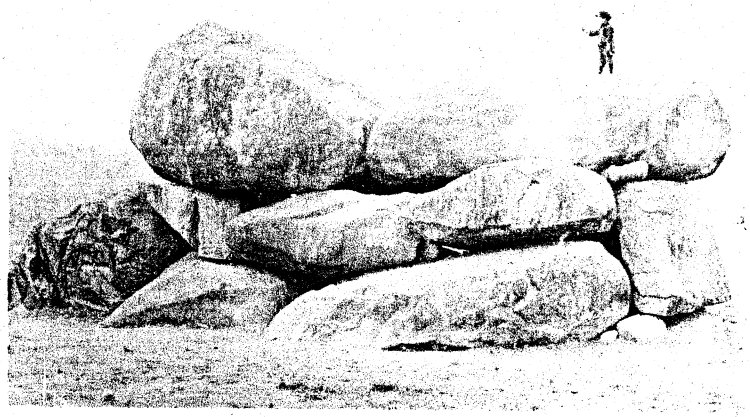
景風査調　墳古臺舞石・庄之島・國和大・蹟史定指



指定史蹟・大和國・島之庄・石舞臺古墳　石室（後側）志野

（側　西）室　石　墳古臺舞石・庄之島・國和大・蹟史定指

部一の棺石・室石冢階　墳古臺舞石・庄之島・國和大・蹟史定指



（側　東）室　石　墳古臺舞石・庄之島・國和大・蹟史定指

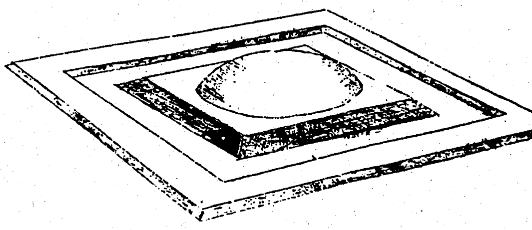
写真３　石舞台古墳絵葉書（島庄青年団）

指定史蹟
石舞臺古墳案内書

奈良縣・島之庄青年團編

・築造當時の墳形想像圖の一・

(下方一成・上円一成)



序

飛鳥(アスカ)川の上流、稲渕・細川・両溪谷は、飛鳥朝時代の史蹟散在し、且つ風光明媚なり

夙に萬葉の歌人は、此の邊りの風景を詠じ、古來より詩境、行樂の地として名高し

此の両溪谷の分岐点ともいふべき地点、即ち我が郷土"島之庄"の東南部に當る、田圃の中に

數万貫の巨石、十數個を以て築かれた「石室」が、地表上に露出してゐる

郷土の者は、此の石室を形態によつてか "石蓋"或ひは "石舞台" と稱してゐる

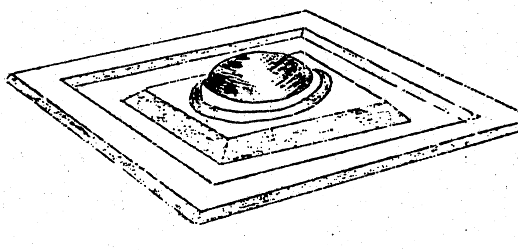
此の石室は、古文書、傳説等により「古墳の残骸」即ち" 上部封土"を取り除かれた、古墳の石室である事は判明して居つたが、此の古墳の築造當時に於ける墳形及び規模等に就いては全く不明であつた 然し此の石室の中へは「馬に乗つて這入れた」といふ昔物語りが傳つてゐるのみで、これとても"羨道(センドウ)"の深廣さの大体を推知する一話材に過ぎぬ

而る處、昭和八年秋(第一次)・昭和十年春(第二次)・両回にわたる「奈良縣史蹟調査會」と「京都帝國大學文學部考古學教室」との御共同御調査により、遂に不明であつた「此の古墳の築造當時の墳形及び規模」等を究明せられ、本邦考古學界史上に一大貢献をもたらせられたものである 當時「ラヂオ」「新聞」「雑誌」等は、逸早くこれらの事を報道した爲、一躍有名となり且又、最近"復原工事着工"と共に、御見學の士、日に増加せり 仍つて當團は「郷土史蹟顕彰」の爲、両回の御調査により判明せる事項、及び参考圖、被葬者に関する傳説及び参考資料等二、綜合編輯し 御見學の便に供せんが爲、本書を刊行するものなり

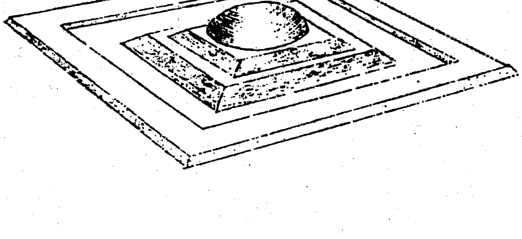
奈良縣高市郡 島之庄青年團

築造當時の墳形想像圖の(二)(三)(四)

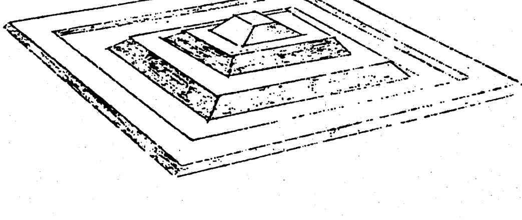
復原可能諸形式



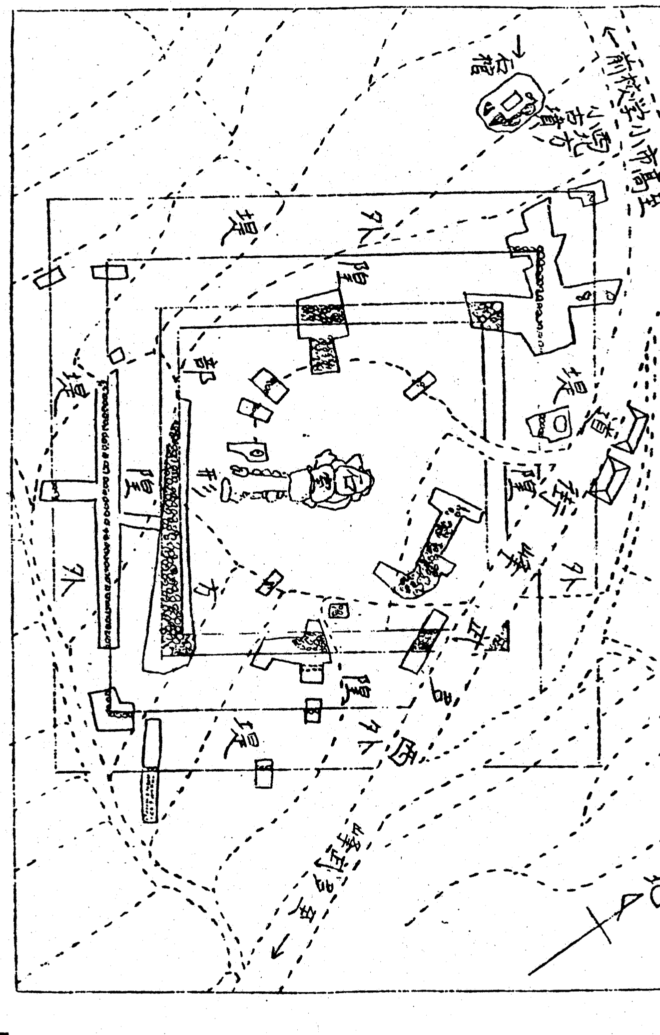
○下方一成・上円二成(上円下方墳)



○下方二成・上円一成(上円下方墳)

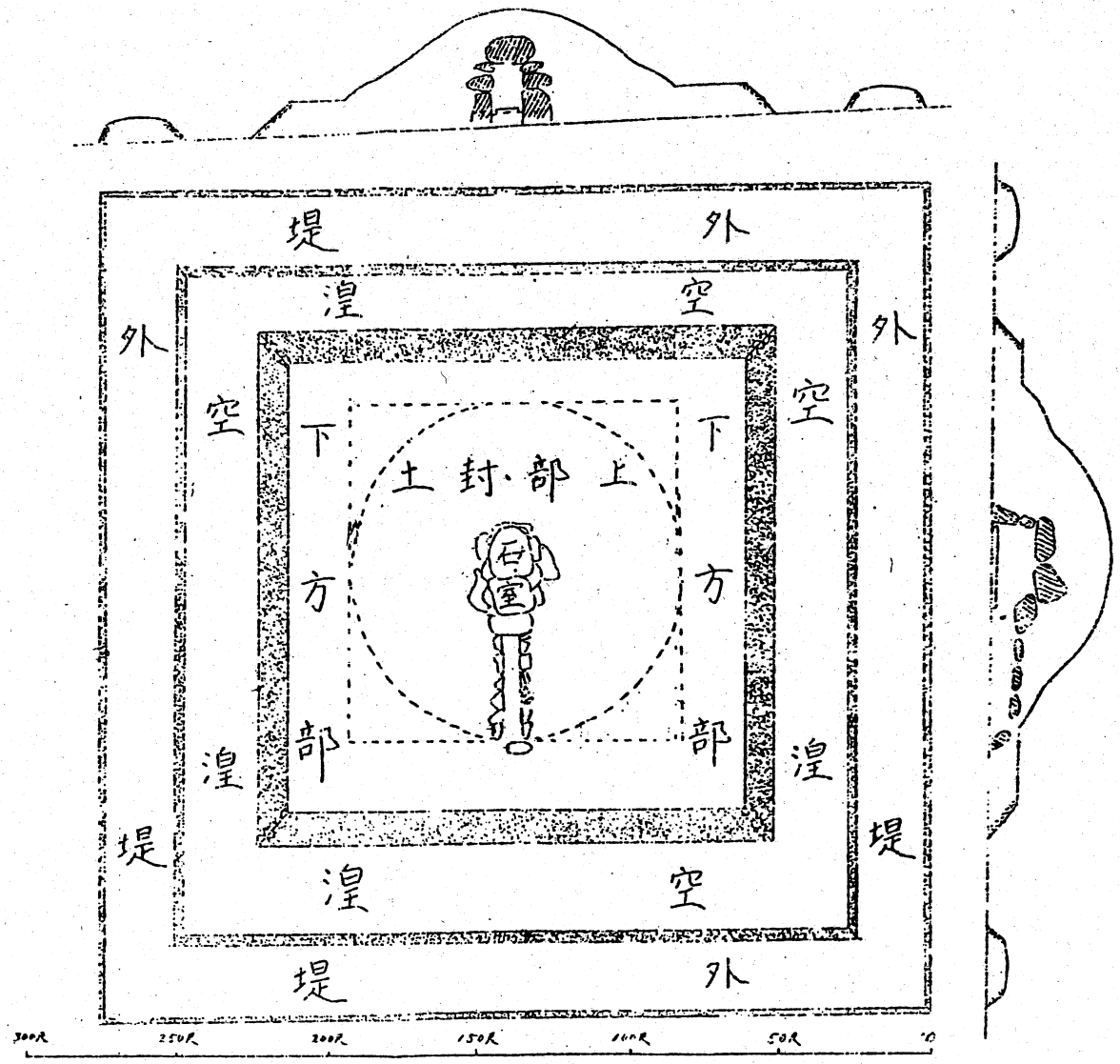


○方形三成(方形墳)

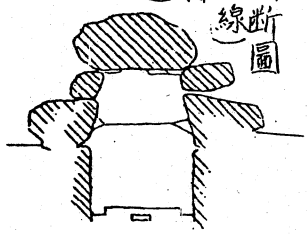


○昭和十年春・外部調査地圖・(第二次調査)

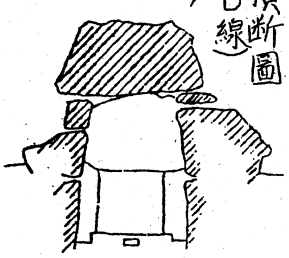
石舞臺古墳　推定復原圖（五百分ノ一）



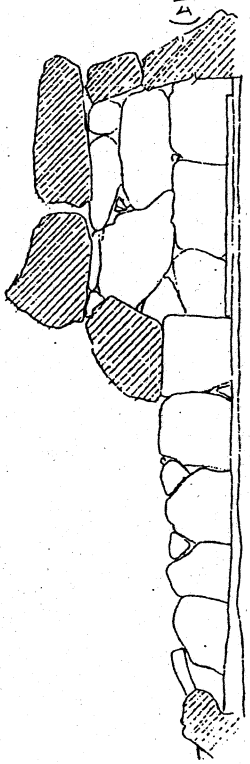
・石室横断圖（奥壁面ヲ望ム）（A線）



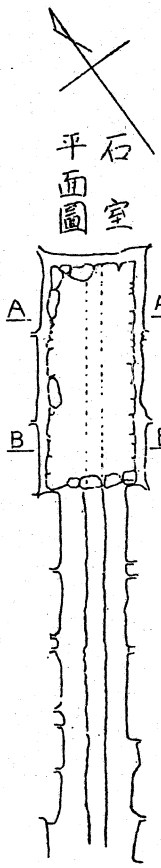
・石室横断圖（羨道ヲ望ム）（B線）



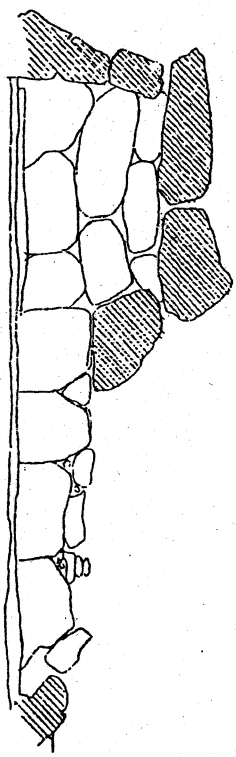
・石室縦断圖（西壁面ヲ望ム）



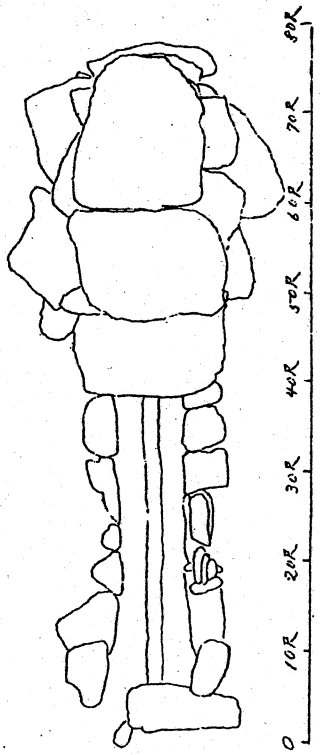
石室平面圖



・石室縦断圖（東壁面ヲ望ム）



・石室上面圖



所在地　奈良縣高市郡高市村大字島庄・石舞台・塚ノ脇

位置　多武峰談山神社の西方約三十五町の地点・即ち談山神社西の門を西下し西國七番靈場岡寺を始め飛鳥朝時代史蹟の散在する高市郡方面に向ふ西多武峰街道の南傍なり・これを逆に云へば岡寺方面より多武峰に至るコースの右側也

交通　大軌吉野線・岡寺駅下車・東南約二十五町・同駅よりバスの便あり

○昭和八年秋第一次御調査以前の状態

石室内部　石室内部（玄室）の下約半分、即ち現在石室後壁面及び両壁面の土泥で汚れてゐる部分迄土樂で埋もつてゐた　勿論現在の様に羨道より入る事は出来ず東北角の間隙より石室内の推土上に滑り込んだものである

石室外部　石室の前方、即ち羨道の上部は芝生地であつた　羨道や羨道両壁面の巨石は埋もつてゐた　然し羨道入口にある巨石だけ其の一部を畦畔に露出し其處迄が羨道であらうとは想像されてゐたものである　石室の左右後方、即ち其の他の三方は石室の附近迄、田地であつた　石室の周圍は漸く通行が出来る程度の細路が環らされてゐるに過ぎなかつた　石室全体の地表上露出程度は現在と餘り変らない

○築造時代　飛鳥朝時代前後（古墳末期）築造と推定されてゐる
・参考　飛鳥・奈良朝時代かけての皇陵形式を示してゐる

○指定史蹟　昭和十年十月二十二日文部省史蹟名勝天然記念物委員會より史蹟保存法による史蹟として指定されたり・指定地域一町二段三畝五歩（約三千七百坪）

被葬者に関する傳説と参考資料

○蘇我馬子墓説（推古天皇三十四年五月薨　紀元千二百八十六年）

（昭和十三年より千三百十二年前）

・日本書紀　巻第二十二　推古天皇三十四年の條中に
夏五月戊子朔丁未大臣薨仍葬桃原墓大臣則稲目宿禰之子也性有武畧亦有辯才以恭敬三宝家於飛鳥河之傍乃庭中開小池仍興小島於池中故時人曰島大臣
・日本書紀　巻第二十三　舒明天皇元年（紀元一三　年）の條中に
蘇我氏諸族等悉集蘇島大臣造墓次于墓所羨道理勢臣墓所之處壞退蘇我田所而不任
・谷川士清氏著（日本書紀通證）巻第二十七　桃原墓　高市郡島庄村有荒墳疑之
・文學博士喜多貞吉氏（歴史地理第十九巻第四號）（明治四十五年）
・蘇我馬子"桃原墓"の推定・稀有の大石槨・島の庄の"石舞台"の石室
「而も島大臣の邸宅の地なる島の庄に於て非常に壮大なる墳墓ありて而して其の地方に他にかゝる偉大なる墳墓の主人公として擬定すべき程の人物嘗て無かりしとすれば若し墳墓の形式が島大臣時代のものに相當する事確め得る以上は暫く其の地を以て所謂"桃原"とし其の墓を以て馬子の桃原墓なるべしと假定して甚しく不可なきを信ず」云々
・文學博士濱田耕作氏著（大和島庄石舞台の巨石古墳）（昭和十二年）
「若し石舞台古墳を歴史上の一定の個人の墓に擬定せんとするならば蘇我馬子の"桃原墓"とする説を以て最も有力なる假説とする外はないであらう」

○天武天皇殯古趾説（朱鳥元年九月崩御　紀元千三百四十六年）

（昭和十三年より千二百五十二年前）

・日本書紀　巻第二十九　天武天皇朱鳥元年九月の條中に
丙午天皇病不差崩于正宮（飛鳥淨御原宮）戊申發哭則起殯宮於南庭辛酉殯
・西國三十三所名所圖會（嘉永元年　暁鐘成・松川半山・浦川公佐　畫）
石蕪台　島庄村の道の傍、田圃の中にあり　則ち岡に下る道の左に見ゆるなり
高凡二間許　周凡十間　大石を以て積みかさねしものなり

傳云　天武天皇を假に葬り奉りし古趾なりとぞ
○文學博士喜多貞吉氏（歴史地理第二十巻）（明治四十五年七月）
「天武天皇の殯宮を起したる飛鳥淨御原宮の南庭は現在の飛鳥小學校の東裏に當るものなるべし　小學校敷地地均らしの際數多の土器を掘出せり宮趾と何等かの縁ある歟」云々
○文學博士濱田耕作氏（大和島庄石舞台の巨石古墳）（昭和十二年）
「石舞台の如き大古墳を其の間に假に作られたとは固より荒墳を利用せられる如きことも有り得ないのであるから此の天武天皇假陵説の如きは全く一顧の價値無きものとする外は無く」云々

参考
○我が郷土「島庄」は天武天皇の別宮「島宮」及び蘇我馬子（島大臣）の邸宅があつた地なりと傳へられ又地名「島庄」（島荘）もこれより起りしものなりと謂はる
○河内國旧石川郡東條に"馬子の墓"と稱せらるものあり

名稱と解説

石太屋（イシブトヤ）　（名稱とは此の墳墓の上部封土が取除かれ、石室が地表上に露出してからの稱呼をいふものなり）
延宝年間発行の"和州旧跡考"に「石太屋とて陵あり」云々とあり
断定し難いがこの石室を指すやうである

石蕪台（イシブタイ）　嘉永年間出版の「西國三十三所名所圖會」に其の名を見出す

石舞臺（イシブタイ）　石室天井部巨石二枚の巨石上部面積が廣大で且つ北方の巨石上が極く平坦なるが故にいはれたのであらう

石蓋（イシブタ）　當地方の者は此の石室に限らず他の古墳の石室をも「石蓋」と呼んでゐる「石蓋」とは巨石を以て蓋せる格好に見ゆる故なり

御調査の概要と其の結果

奈良縣史蹟調査會
京都帝大文學部考古學教室共同御調査

○第一次御調査（自昭和八年十一月六日・至同年十二月五日）

概要　石室及び羨道の内外に埋もつてあつた土樂を取除く作業を施行された点
特殊工作を施行された事
一、石室及び羨道内に埋もつてあつた土樂をトロッコで外部に搬出した事
二、石室内の水溜り（雨水流入）を防ぐ爲石室の上部にテントをかぶせた事
三、石室内の照明に電車用ヘッドライトを使用された事
四、飛行機にて上空より石室を中心に附近一帯の地形を撮影し外廓調査の一資料にされた事（大朝飯沼飛行士操縦奥野写真班員同乗）

結果　・築造當時の石室及び羨道の構造規模判明す
・石床下部に暗渠式及び羨道の中軸部に開渠式の排水溝施設ある事を發見す
・石室及び羨道内より「土師器」「祝部土器」等の破片多數及び「石棺」の破片らしい松香石の断片一個古錢數個等出土す
・石室の東方より「石葺傾斜面」を發見す（この石葺は昭和十年春第二次御調査によつて東辺下方封土貼石積の一部であつた事が判明した）

○第二次御調査（自昭和十年四月六日・至七月一日）

概要　主として外廓の御究明なり
・上部封土の痕迹らしい散乱せる石群と「下方封土貼石積部」數ヶ所及び隅角三個所と外堤内側及び外側の貼石積部數個所及び隅角三個所が發見された
・築造當時は周囲に空濠（隍）及び外堤を環らした面積六段八畝餘に及ぶ整然且つ豪壮な所謂「方形墳」（或ひは上円下方墳）であつた事が判明した
但し「上部封土」の形式が未だ確かに判らない（復原可能諸形式圖参照）
・外堤西北角の西方約三十五尺の地点より南面せる一小古墳（陪冢？）の石室及び石棺の一部が發見された
「土師器」「祝部土器」等の破片多數及び金属製遺物三個出土す

結果

両度の御調査により判明せる各部分の規模及び構造

石室

本邦巨石古墳石室中最大級の一（天井部二枚の巨石推定重量三万七千五百余貫）

（東西両壁面は三段奥壁面は二段に又玄室の上部は下部よりも約三尺狭い）

（石床を發見され其の周囲三方及び石床下部中央より排水溝を發見す（詳細次項））

石室内部（玄室）の規模

（高さ約十五尺五寸・幅約十一尺五寸

奥行約二十六尺・面積約十六畳敷）

石室内への浸水は石床周囲三方の細溝（閘渠）に入り一旦玄室奥部中央に合流し石床下部中央の排水溝（暗渠）（幅約一尺四寸深さ約五寸）を潛流し羨道中央部に出で排水溝（閘渠）を南流、外部（南方空濠内）に流出する

排水溝

石床下部の排水溝（暗渠）には礫石が充填され一種の濾過裝置が施こされてある（参考）・本邦古墳調査史上に於て玄室の排水溝施設發見は當古墳が最初

羨道（センドウ）

長さ約三十八尺・幅九尺に於て約七尺・南端に於て約八尺・外に向つて順次低くなつてゐる

拡がる・高さは玄室の入口の所で約八尺五寸・外に向つて順次低くなつてゐる

両壁面巨石數（東壁面四個・西壁面五個現在羨道の上部に石は無いが築造當時は數個（三個？）の蓋石があつた筈（羨道入口にある巨石は其の蓋石の一個？）

玄室を中心として半徑約五十五尺乃至六十尺の地点數個所より上部封土の根石らしい石群が發見された・封土は方基上約四十尺位あつたものと推定されてゐる・形式は不明であるが底徑約百十尺位の上円一成又は上円二成

上部封土

又は一辺約百十尺位の二段方形封土があつたもの？と推考されてゐる・又上部封土には貼石がしてあつたもの？否？に就いては不明であるが空濠内に散乱せる礫石が出土するを以て上部封土に貼石がしてあつたものとの推察も起つてゐる

下方封土（方形部）

東西南北各々一辺約百七十尺・高さ約八尺（垂直高）傾斜面約三十度乃至三十五度・人頭大の自然石を傾斜面に貼付け根廻りは稍々大石が用ひられ特に隅角は自然稜角を具へた巨石が擇用され實に豪壮な感じを與へてゐる

外堤

外堤一辺の長さ東西二百七十三尺（推定）・南北二百六十八尺（推定）・「下方部貼石積部と同様の貼石工作が施こされてゐる・上部幅員約二十三尺・底部幅員約二十七尺・高さ約五尺（垂直高）・鎌鉾状に土があつた筈だから實際の高さは約七尺位？

空濠（ウラホリ）（隍）

下方部貼石積部と外堤貼石積部内側との中間にして、南側（正面）の底幅は約十六七尺・東側と西側との底幅は各々約二十五六尺・北側（後方）の底幅は約十七八尺・水濠で無い證據は東北部の隍底が南側の外堤の高さより高位であり、又發掘の際隍底より黒泥が出なかつた

○西北方より發見された一小古墳（陪冢？）

横穴式円墳であつたらしい・石舞台古墳の方を向いてゐる為陪冢？との説もある

石室及び石棺の上部が破壊され底部だけ現存す・玄室奥行約十一尺・幅約六尺五寸

石棺の石質は松香石なり縦七尺七寸餘・幅約四尺一寸餘・底の厚さ約一尺五寸

周囲壁面の厚さ約七寸五分・即ち内法は縦六尺二寸余・横幅約二尺六寸余

参考

約四十年前耕地整理の時發見され其の時石棺の壁面を破壊され底部のみを埋没されたもので今回の發見は此の事を知る老人の言を綜合探査し再掘されたものである但し現在は工事の都合上又埋没されてゐる

◎復原保存工事（昭和十二年度着工）

昭和十五年の紀元二千六百年祭迄に國家事業として四ケ年継續事業総工費二万數千円（予算）を以て復原保存される事となれり

即ち指定地域を買收し西多武峰街道の一部をつけかへ、外堤内外、空濠（隍）部下方部の上にある推積土礫を搬出整備し、又西南方の欠損せる外堤及び下方部を補築し「古の姿」即ち築造當時の形態に復原される

既に昭和十二年の夏より秋にかけて南方（正面）下方部貼石部及び外堤内側貼石部の約七分通りは復原補強（セメント）工作が施工完成された

参考・上部封土の復原は築造當時の形式が不明である為着手されない苦である

（完）

○附近著名史蹟名勝

飛鳥川　稲渕・細川両支流合流・萬葉集によつて名高し

良助法親王墓（冬野領）人皇九十代亀山天皇第八皇子・天台宗第百世座主・

都塚（金鳥塚）（坂田領）元朝に金鳥來りて鳴くとの傳説あり・石室内に石棺現存す

坂田寺址（坂田領）継体天皇十六年・司馬達等佛像安置礼拝せる所（坂田原）

南渕請安墓（稲渕領）中大兄皇子・藤原鎌足公の師（徳川頼倫侯題額碑）

竹野王碑（稲渕領）龍稿寺境内・銘天平勝宝四年（日本最古の石塔）

男根石（祝戸領）坂田寺門柱石説

橘寺（橘領）用明天皇皇居橘宮址・聖徳太子御誕生地・右近橘・左近櫻・黒駒塚

島宮址（島庄領）高市小学校敷地・天武天皇別宮・皇太子草壁皇子（岡宮天皇）皇后

定林寺（立部領）聖徳太子御建立七大寺の一

川原寺（川原領）川原宮址・斉明天皇元年創建説・瑪瑙碧石二十六個現存

天武持統陵（野口領）檜隈大内陵

丸山古墳・菖蒲池古墳・（五條野領）皇陵傳説古墳・共に石棺二個宛現存す

鬼の俎・鬼の雪隠（野口領）欽明天皇陪冢附属地（石槨）

板蓋宮址（岡領？）大極殿・中大兄皇子・藤原鎌足公・蘇我入鹿誅滅の地（大化改新）

飛鳥寺（飛鳥領）本尊日本最古金銅佛像・飛鳥京址・中大兄皇子藤原鎌足公蹴鞠の地

酒舟石（岡領）上代神酒汲溜用石？

岡寺（岡領）西國七番霊場・本尊・塑像（本邦最大最秀）國宝・義渕僧正建立・岡宮址

○飛鳥朝時代の諸宮址及び史蹟至る所にあり繁雑なれば省略す

昭和十年六月一日　内務省屈出済　實費領附　金拾錢
昭和十三年四月一日　第十六回発行
発行所　奈良縣高市郡高市村島之庄青年団・一編輯人同所綱千順誠
謄寫所　同所　一謄寫人同所同

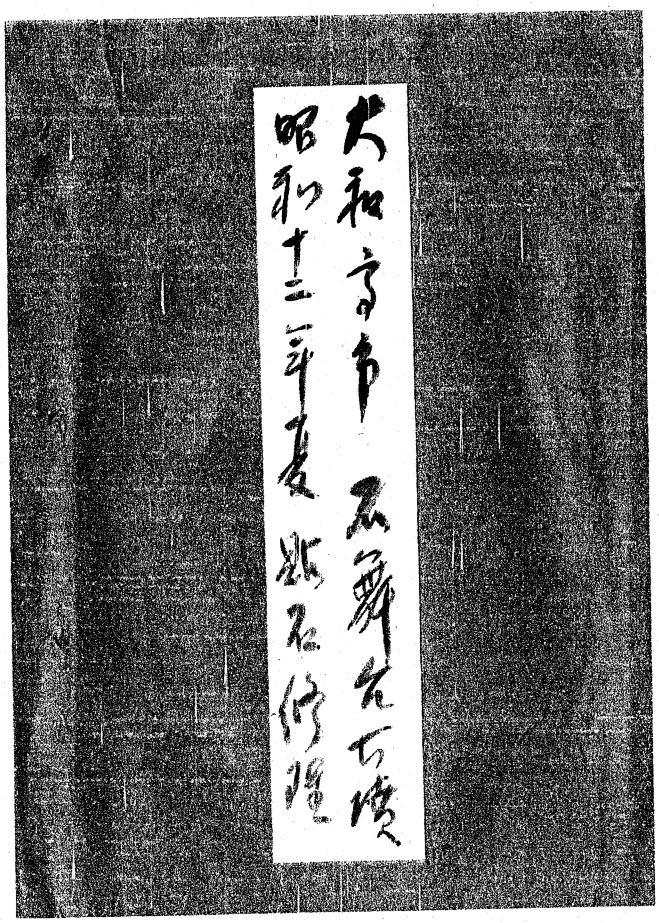
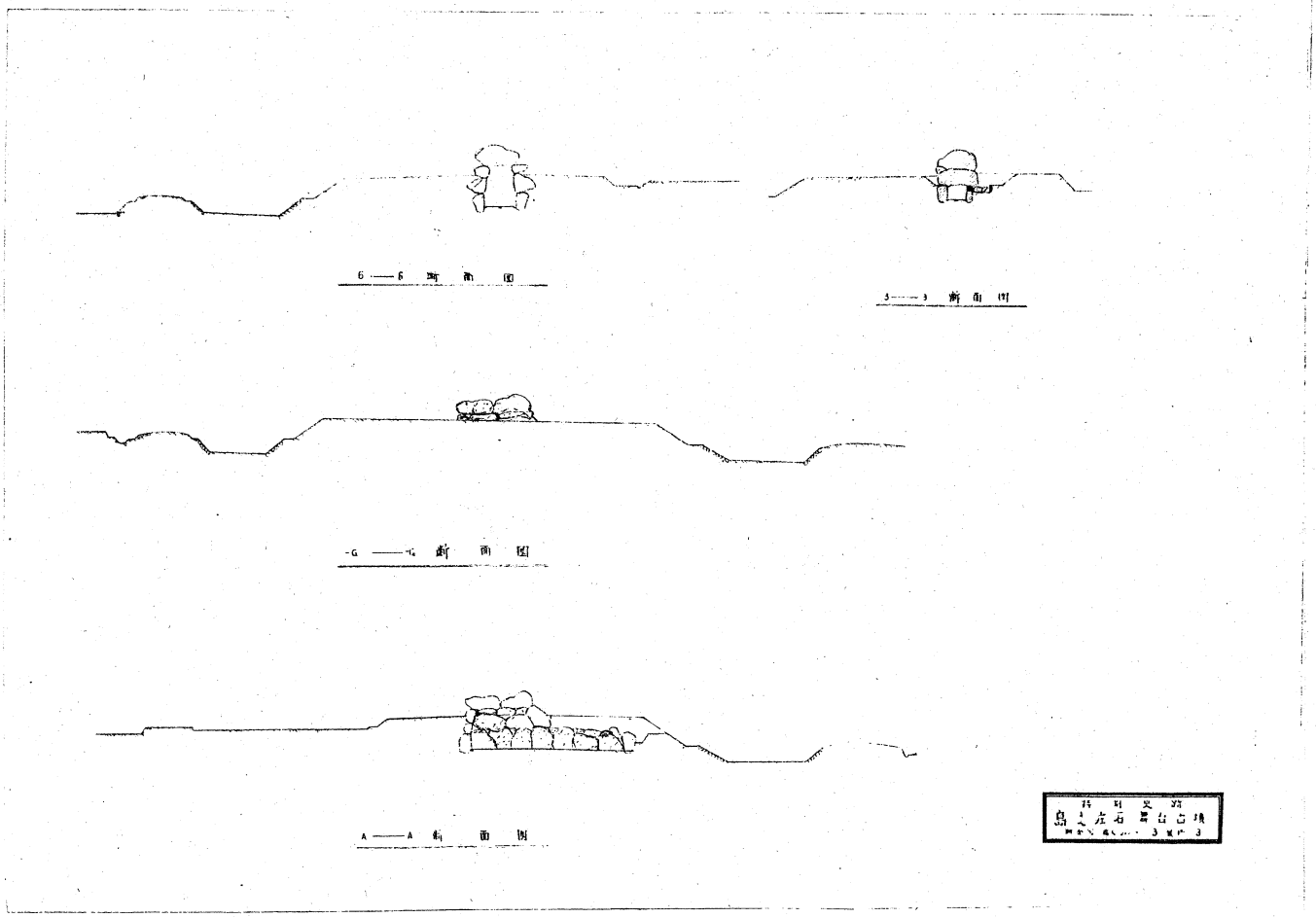
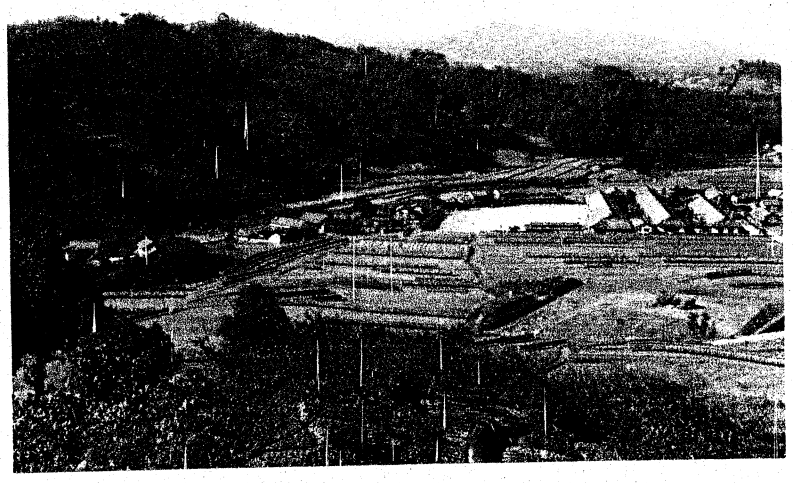


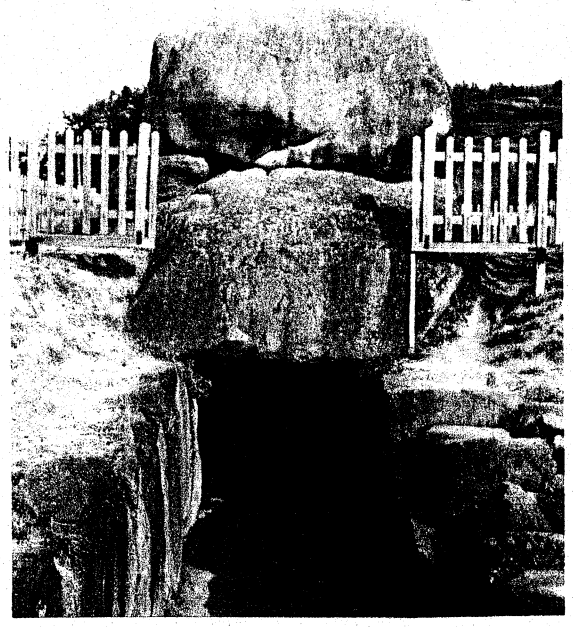
写真４　末永雅雄先生の墨跡

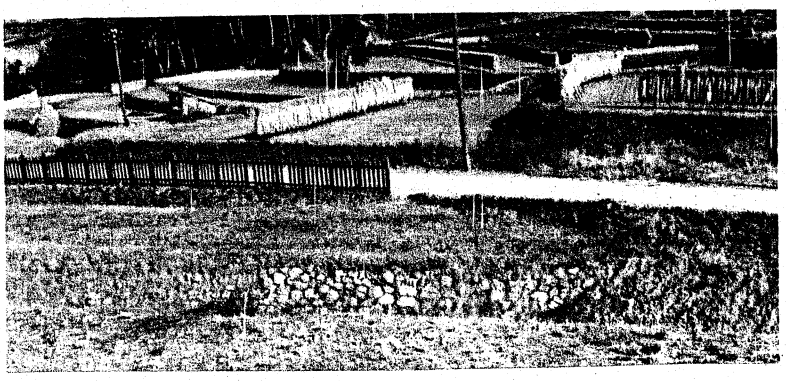
第8図　第二期調査　石舞台古墳平面図

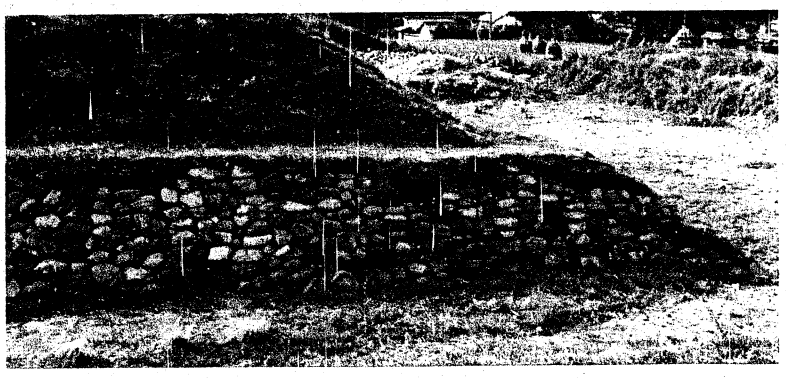


第9図　第二期調査　石舞台古墳断面図









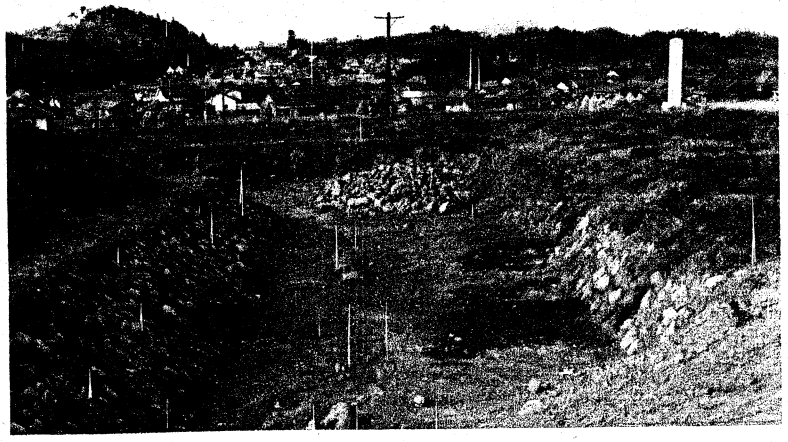
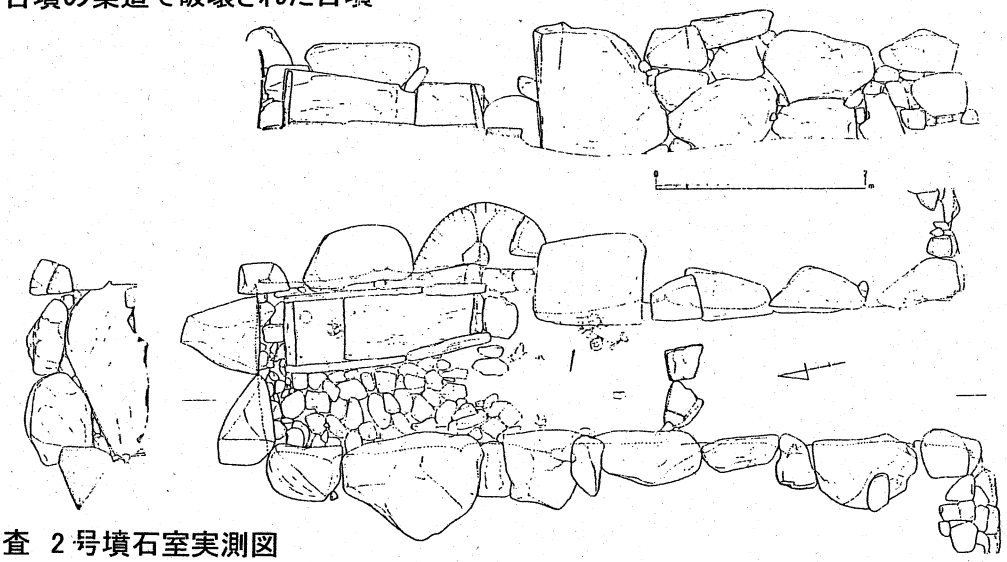
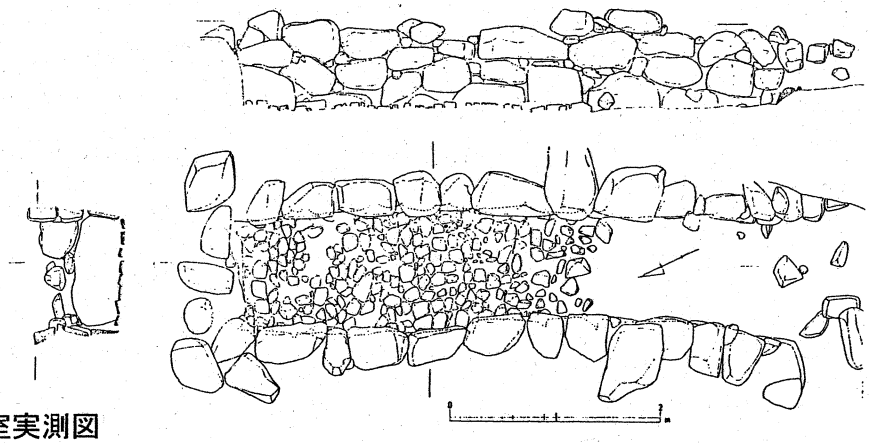


写真５　石舞台古墳第二期調査風景

第 10 図 第三期調査 石舞台古墳の築造で破壊された古墳



第 11 図 第三期調査 2 号墳石室実測図



第 12 図 第三期調査 4 号墳石室実測図

小古墳けちらし石舞台

外堤近く石室発見

蘇我氏の権勢示す？築造

橿原考古学研究所

古代の中央豪族、蘇我馬子（そがのうまこ）の墓といわれる奈良県高市郡明日香村島之庄の特別史跡石舞台古墳付近で、四日、小古墳が発見された。一説は石舞台の外堤で削られており、発掘した奈良県橿原考古学研究所（末永雅雄所長）は「小古墳の築造年代は、石舞台より半世紀ほど前。巨大な石舞台を築造する際、この小古墳がじゃまになってつぶした可能性が強い」とみている。古墳を壊して新しい古墳を造った、というケースは、これまで全国的に見つかったことはなく、権力をほしいままにした中央豪族の力を示す貴重な歴史資料となりそう。

研究所は、建設省の国営飛鳥歴史公園造成に伴い、石舞台周辺の水田を一日から発掘調査にかかっていた。この外堤に接した水田下、約五十㍍を掘ったところ、ほとんど破壊されているが、西に開口した石室の跡が見つかった。石室の底石や、その周辺をとり囲む「外堤列石」も一部残っており、これらから、石室は幅約一㍍、長さは約三㍍、墳丘は直径約十㍍の円墳と推定された。

この円墳は①墳丘の東側約三分の一が、石舞台の外堤下にはいっている②築造時期は、七世紀初めの石舞台よりも古い六世紀中ごろ③石舞台の墳丘に比べて小型――などから、石舞台を築いた蘇我氏が、ゆえからあった小古墳を壊したのではないか、と研究所はみている。

石舞台は、わが国の横穴式石室としては最大級で、むき出しになった天井石二枚のうち一枚は七十七㌧もある。墳丘は一辺五十一㍍の正方形で、周濠（しゅうごう）幅五・四―八㍍）と外堤（幅約二㍍）で囲まれている。

石舞台は六世紀中ごろから後半にかけての築造。歴史学者の宮田尊利博士らの研究で、世紀は七世紀初めに国家権力をにぎった蘇我馬子（六二六年没）の墓とみる説が現在最も有力。研究所は「馬子が存命中か、あるいは馬子の死後に一族が、土師の〝飛鳥人〟の墳墓群ともみられる古墳群の一部をつぶし、大古墳の石舞台を築造したとみることもできる」としている。別説に強い「日本書紀」でも「悪人」扱いされている蘇我氏だが、この「築つぶし」で〝第一歩〟がさらに加えられそう。

石舞台古墳（上方）の外堤付近で見つかった石室＝点線。蘇我氏につぶされたとの説も（4日、奈良県高市郡明日香村島之庄で）

昭和50年11月5日号

蘇我氏の懲罰と別室町期の造成で

石舞台のむき出し

橿原考古学研

古代史上のなぞの一つ、蘇我馬子の墓といわれる奈良県・明日香村島庄の特別史跡石舞台古墳がむき出しにされている理由について、朝廷に逆らった蘇我氏懲罰のため、との説が一般化しているが、盛り土が取られたのは室町期（十四世紀）以降で、墓墓きと全く関係ないことが二日、橿原考古学研究所（末永雅雄所長）から明らかにされた。

同研究所は、建設省の石舞台周辺飛鳥国営公園建設に伴い、今年二月から平面調査にかかった。同古墳のすぐ北側で階段状の水田二カ所（約八十平方㍍、約百平方㍍）を発掘したところ、一段上の水田は、室町期の土器が発掘されたことなどから地下約一・五㍍まで室町期以降の地層、低い水田も地下約五十㌢まで同時期だったとみられ、室町期以降に付近一帯の土地を階段状の水田に造成したことがほぼ確認された。

この結果、同研究所は①これだけ多量の土が手軽に採取できるのは、近くの石舞台古墳の盛り土しかない②室町期の造成した地層に凝灰岩の破片が多数見つかり、石室が同古墳の石材や墳丘（しゅうこう）のふき石と同じ③室町期の地層に、同期の土器にまじって七―八世紀の土師器片がみつかった――などの点から、室町期以降に石舞台古墳の盛り土を削って水田を造成するのに使ったのではないか、と判断した。

同古墳は、わが国の横穴式石室としては最大級。古くから石室の盛り土を失い、むき出しになった天井石二枚のうち一枚は七十七㌧もある。墓墓者について史学者宮田尊利博士らの研究で、七世紀に国家権力をにぎった蘇我馬子（六二六年没）の墓と見る説が現在、一番有力。馬子の死後、その子蝦夷（えみし）や孫入鹿が天皇家と勢力を争い、滅ぼされるという事件が起きた。このため、朝廷側は蘇我氏一族の反逆に対し懲罰のため、馬子の墓の盛り土を取り除いた、との説が一般化したわけだが、今度の発掘で、この通説が根本から覆ることになった。

昭和48年12月3日号

昭和58年10月25日号

今日の問題

石舞台五十年

奈良県明日香村の石舞台古墳が発掘されてから、来月五日でちょうど五十年になる。

田んぼのなかにむき出しになった巨石群が、大昔の貴人の墓だろうということは推定されていたが、玄室（げんしつ＝棺を置いたところ）はもちろん、入り口から玄室までの羨道（せんどう）にも、土がいっぱいつまっていたという。

作業は京都大学考古学研究室と奈良県が共同で昭和八年十一月五日に埋葬者の墓室を行い、翌六日から始まった。指揮者は奈良県立橿原考古学研究所の前所長、末永雅雄さんだった。

石舞台発掘は、それ自体の学問的成果のほかにわが国の考古学史上、二つの意味があると考えられる。一つは、それまで副葬品や人骨、棺などを主な対象にしていたわが国の考古学が、石舞台のような巨石構造物の研究にも手を伸ばすきっかけになったこと、二つは、考古学を大衆により身近なものとして、高松塚壁画古墳を頂点とする戦後の考古学ブームの下地をつくったことである。

世間の反応は敏感で、日曜日などは地元奈良県はもとより、京都、大阪などからも数千人の見学者が集まり、現場近くには露店も出た。

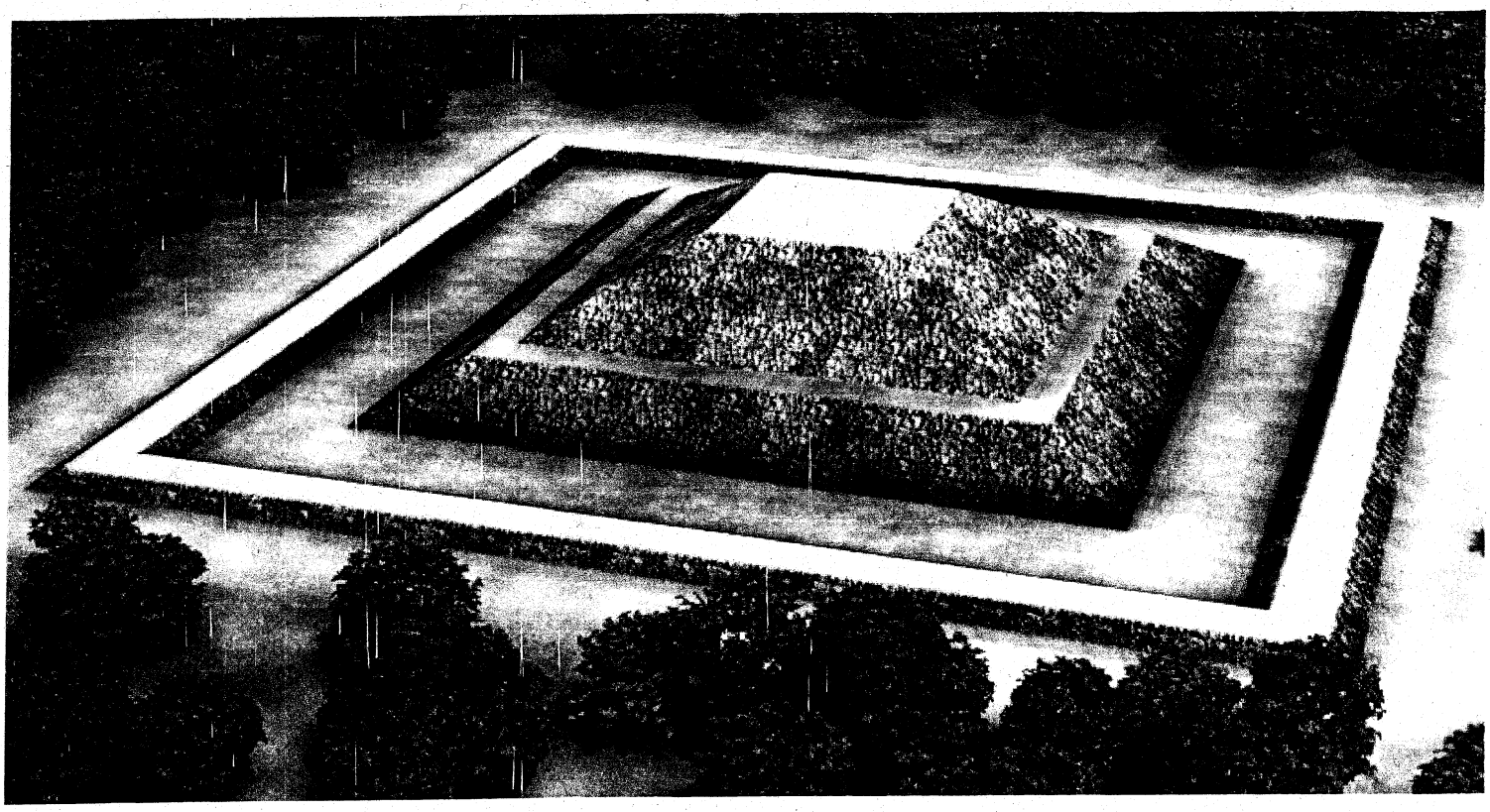
興味深いのは、こうした考古学ファンの要望にこたえて、発掘側がすぐ現地説明会を開いたことである。その資料をつくって売った地元青年団の財政は大いにうるおった、と当時を知る村の人たちは語っている。

考古学には、しろうとはしろうとなりにあれこれ推測して古代へ夢をはせるおもしろさがある。それが国土への認識を深め、民族の根元への敬愛につながるとなると、考古学は単に個人の趣味や好奇心の問題より以上に広がってくる。

たとえば奈良国立文化財研究所や大阪府教委・同文化財センターなどが、発掘調査の現場で自発的に現地説明会をよく開いているのは、専門家と関西の一般愛好家の間に、この石舞台以来の伝統があるからだという人もいる。

こんな〝情報公開〟はもっと広まってほしいと思う。がそのためには、見学者の方にも発掘作業の邪魔にならないだけのけじめが必要だろうし、発掘者の側にも発掘手続きや出土品の評価などを、批判に耐えるものとする配慮がなければならない。

第13図　第三期調査関連　新聞報道（朝日新聞）



第 14 図 石舞台古墳 CG復元図

第 15 図 石舞台古墳における埋葬儀礼想定図

『日本書紀』推古天皇三十二(624)年冬十月

秋九月の甲戌の朔(三日)丙子に、寺及び僧尼を校へて、具に其の寺の造れる縁、亦僧尼の入道ふ縁、及び度せる年月日を錄す。是の時に當りて、寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、幷て一千三百八十五人有り。

冬十月の癸卯の朔に、大臣、阿曇連名を闕せり。阿倍臣摩侶、二の臣を遣して、天皇に奏さしめて曰さく、「葛城縣は、元臣が本居なり。故、其の縣に因りて姓名を爲せり。是を以て、冀はくは、常に其の縣を得りて、臣が封縣とせむと欲ふ」とまうす。是に、天皇、詔して曰はく、「今朕は蘇何より出でたり。大臣は亦朕が舅たり。故、大臣の言をば、夜に言さば夜も明さず、日に言さば日も晩さず、何の辭をか用ゐざらむ。然るに今朕が世にして、頓に是の縣を失ひてば、後の君の曰はまく、『愚に癡しき婦人、天下に臨みて頓に其の縣を亡せり』とのたまはむ。豈獨り朕不賢のみならむや。大臣も不忠くなりなむ。是後の葉の惡しき名ならむ」とのたまひて、聽したまはず。

三十三年の春正月の壬申の朔(七日)戊寅に、高麗の王、僧惠灌を貢る。仍りて僧正に任す。

三十四年の春正月に、桃李、花さけり。

三月に、寒くして霜降る。

夏五月の戊子の朔(二十日)丁未に、大臣薨せぬ。仍りて桃原墓に葬る。大臣は稲目宿禰の子なり。性、武略有りて、亦辨才有り。以て三寶を恭み敬ひて、飛鳥河の傍に家せり。乃ち庭の中に小なる池を開れり。仍りて小なる嶋を池の中に興く。故、時の人、嶋大臣と曰ふ。

『日本書紀』皇極天皇元年(642)年十二月

十二月の壬午の朔に、天の暖なること春の氣の如し。甲申に(三日)、雷、五畫鳴り、二夜鳴る。甲午に(十三日)、初めて息長足日廣額天皇の喪を發す。是の日に、小德巨勢臣德太、大派皇子に代りて誄す。次に小德粟田臣細目、輕皇子に代りて誄す。次に小德大伴連馬飼、大臣に代りて誄す。乙未に(十四日)、息長山田公、日嗣を誄び奉る。辛丑に(二十日)、雷三東北の角に鳴る。庚寅に(九日)、雷二東に鳴りて、風ふき雨ふる。壬寅に(二十一日)、息長足日廣額天皇を滑谷岡に葬りまつる。是の日に、天皇、小墾田宮に遷移りたまふ。或本に云はく、東宮の南の庭の權宮に遷りたまふといふ。甲辰に(二十三日)、雷一夜鳴る。其の聲裂くるが若し。辛亥に(二十日)、天の暖なること春の氣の如し。

是歳、蘇我大臣蝦夷、己が祖廟を葛城の高宮に立てて、八佾の儛をす。遂に歌を作りて曰はく、

大和の　忍の廣瀬を　渡らむと　足結手作り　腰作らふも

又盡に國擧る民、幷て百八十部曲を發して、預め雙墓を今來に造る。一つをば大陵と曰ふ。大臣の墓とす。一つをば小陵と曰ふ。入鹿臣の墓とす。望はくは死りて後に、人を勞らしむること勿。更に悉に上宮の乳部の民を聚めて、乳部、此をば美父といふ。塋兆所に役使ふ。是に、上宮大娘姫王、發憤りて歎きて曰はく、「蘇我臣、專國の政を擅にして、多に行無禮す。天に二つの日無く、國に二の王無し。何に由りてか意の任に悉に封せる民を役ふ」といふ。茲より恨を結びて、遂に俱に亡されぬ。是年、太歳壬寅。

二年の春正月の壬子の朔の旦に、五つの色の大きなる雲、天に滿み覆ひて、寅に闕けたり。一つの色の青き霧、周に地に起る。辛酉に(十日)、大風ふく。

第1表 年表(551年～590年)

文化時代	西暦	「日本書紀」	干支	日本	大臣	大連	世界	中国 北済	中国 西魏	中国 梁	新羅	高句麗	百済
(古墳時代後期)	551	欽明 12	辛未	百済・新羅・任那,高句麗と戦い,百済は旧都漢城の地など6郡を回復する(紀).	(蘇我稲目)	(物部尾輿)	東ローマ,スペイン南部を領有する.	2	17 廃帝	予章王 天正	(宣興王)	(陽原王)	(聖王)
	552	13	壬申	百済の聖明王,釈迦仏像と経論を献ずる. 仏像礼拝の可否を群臣に問う(紀. 538年の史実を書紀編者が改変か). 新羅,漢城・平壌の地を領有する(紀).			新羅,百済から漢城・平壌を奪う. 突厥,柔然を滅ぼす.	3	1	元帝 承聖			
	553	14	癸酉	百済,軍兵の派遣を要請. 百済に医・易・暦博士の上番を求める. 蘇我臣稲目,王辰爾に船の賦(みつぎ)を記録させる(紀).				4	2	2			
	554	15	甲戌	百済,再び軍兵を要請. 百済,僧曇慧と五経・易・暦・医博士らを交替派遣. 百済に兵1000人・馬100匹・船40隻を送る. 倭・百済両軍,新羅と戦い,百済の聖明王戦死(紀).			東ローマ,東ゴートを滅ぼしイタリアを領有する. 西魏,南朝の江陵を陥れ,後梁を建てる(～587).	5	恭帝	3			威徳王
	555	16	乙亥	百済王子の余昌,弟の恵を遣わし,聖明王の戦死を告げる(紀). 蘇我臣稲目らを遣わし,吉備に白猪屯倉をおく(紀).				6	2	貞陽侯 天成 敬帝 紹泰			
									北周 孝閔帝				
	556	17	丙子	百済の恵,帰国. 筑紫の水軍,筑紫火君の兵,恵を護送(紀). 蘇我稲目らを遣わし,備前児島に屯倉をおき,葛城直瑞子を田令とする. 倭(大和)国高市郡に韓人大身狭屯倉・高麗人小身狭屯倉を,紀国に海部屯倉をおく(紀).				7		太平			
										陳			
	557	18	丁丑				西魏滅び,北周興る. 陳崩先(武帝),梁にかわって陳朝を建てる(～589).	8	明帝	武帝 永定			
	558	19	戊寅					9	2	2			
	559	20	己卯					10 廃帝 乾明	武成	文帝		平原王	
	560	21	庚辰	新羅,朝貢する(紀).			北斉,高句麗王世子湯を使持節領東夷校尉遼東郡公高麗王とする.	孝昭帝 皇建	2 武定	天嘉			
	561	22	辛巳	新羅の使者,百済より下位に序列されたのを怒り,帰国して倭の攻撃に備える(紀).				武成帝 太寧	保定	2			
	562	23	壬午	新羅,任那官家を滅ぼす. 紀臣男麻呂,任那に渡り新羅と戦うが,敗れる. 大伴連狭手彦,高句麗と戦う(紀).			陳,百済王に撫東大将軍,高麗王に寧東将軍を授ける.	河清	2	3			
	563	24	癸未	この頃,北九州で装飾古墳が盛行する.			突厥,サーサーン朝と結び,エフタルを破る(～567).	2	3	4			
	564	25	甲申	埴輪が畿内で衰退し,かわって関東で盛行する. 西日本で群集墳がさかんにつくられる.			北斉,河清律令を公布する. 新羅,北斉に入貢する.	3	4	5			
	565	26	乙酉	この頃の島根県松江市岡田山1号墳から,「各田P臣」(額田部臣)の銘文をもつ鉄刀が出土している(鉄刀の年代については,7世紀と推定する説もある).			新羅王,北斉より使持節領東夷校尉楽浪郡公新羅王を授けられる.	後主 天統	5	6			
	566	27	丙戌				新羅,皇龍寺を建立.	2	天和	廃帝 天康			
	567	28	丁亥					3	2	光大			
	568	29	戊子				新羅の真興王,黄草嶺・磨雲嶺に(この頃,北漢山にも)巡狩管境碑をたてる. ランゴバルド族の北イタリア定住始まる.	4	3	2 宣帝			
	569	30	己丑	王辰爾の甥,胆津を白猪屯倉に遣わし,田部の丁籍を定める. 胆津に白猪史の姓を授け,田令に任ずる(紀).				5	4	太建			
	570	31	庚寅	高句麗の使人,越国に漂着する(紀).			百済王,北斉より使持節侍中驃騎大将軍帯方郡公百済王を授けられる.	武平	5	2			
(古墳時代後期)	571	欽明 32	辛卯	新羅に使を遣わし,任那滅亡の理由を問う. 天皇,任那再興の詔を遣して没する(紀).	(蘇我馬子)	(物部守屋)	北斉,百済王を使侍節都督東青州刺史とする.	2	6	3	(宣興王)	(平原王)	(威徳王)
	572	敏達	壬辰	王辰爾,高句麗の上表文を解読する. 高句麗の使人,帰国する(紀).				3	建徳	4			
	573	2	癸巳					4	2	5			
	574	3	甲午	高句麗の使人,越に来着し,上京. 蘇我馬子を吉備に遣わし,白猪の屯倉と田部を充実させ,田部の名籍を白猪史胆津に与える(紀).			北周の武帝,廃仏を行なう.	5	3	6			
	575	4	乙未	新羅と任那と百済に使を送る. 新羅,多多羅・須奈羅・和陀・発鬼の4邑の調(任那の調)を献ずる(紀).				6	4	7			
	576	5	丙申					隆化	5	8	真智王		
	577	6	丁酉	日祀部・私部をおく. 百済に使を遣わす. 百済の威徳王,経論と律師・禅師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工の6人を贈る(紀).			北周の武帝,北斉を滅ぼして華北を統一する. 高句麗・百済,北周に入貢. 高句麗王は上開府儀同大将軍遼東郡開国公遼東王を授けられる.	幼主 承光	6	9			
	578	7	戊戌						宣帝 宣政	10			
	579	8	己亥	新羅,調と仏像を贈る(紀).					静帝 大成 大象	11		真平王	
	580	9	庚子	新羅,調を献ずるが,朝廷は拒絶する(紀).					2	12			
									隋				
	581	10	辛丑	蝦夷の首長,綾糟ら,朝廷への服属を誓う(紀).			楊堅(文帝),北周に代って隋を建てる(～618). 隋,開皇律を公布. 隋,百済王に上開府儀同三司帯方郡公を,高句麗王に大将軍遼東郡公を授ける.		文帝 開皇	13			
	582	11	壬寅	新羅,調を献ずるが拒絶する(紀).			隋,開皇令を公布.		2	14			
	583	12	癸卯	任那復興のため,火葦北国造の子,日羅を百済より召喚する(紀). 蘇我馬子,石川の宅に仏殿をつくる(元興寺縁起. 紀は翌年のこととする).			隋,開皇律を重修する. 突厥,隋に敗れ,東西に分裂する.		後主 至徳	3			
	584	13	甲辰	新羅に難波吉士木蓮子を遣わす(紀).					4	2			
	585	14	乙巳	蘇我馬子,塔を大野丘の北に建て,盛大な法会を行なう. 物部守屋,塔・仏殿を焼き,仏像を難波の堀江に棄てる(紀).					5	3			
	586	用明	丙午	穴穂部皇子,物部守屋に三輪君逆を斬殺させる(紀).					6	4			
	587	2	丁未	天皇,病のため仏教に帰依せんことを群臣にはかる. 物部守屋・中臣勝海は反対する. 中臣勝海は殺され,物部守屋と蘇我馬子は,たがいに兵を集めて対立. 司馬達等の子,鞍部多須奈,天皇のために仏像と寺をつくらんと願う. 天皇没. 蘇我馬子,皇后(のちの推古天皇)を奉じて,穴穂部皇子と宅部皇子を殺す. ついで泊瀬部皇子(のちの崇峻天皇)・厩戸皇子(聖徳太子)らとともに,物部守屋を滅ぼす. 守屋の奴の半分と宅を,のちに四天王寺の奴・田荘とする(紀).			隋,諸州より毎年3人を推薦させる(科挙制の開始).		7	禎明			
	588	崇峻	戊申	百済,仏舎利を献じ,僧・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工を贈る. 蘇我馬子,善信尼らを百済に留学させる. また飛鳥に法興寺(飛鳥寺)の建立を始める(紀).					8	2			
	589	2	己酉	近江臣満を東山道に,宍人臣鴈を東海道に,阿倍臣を北陸道に遣わして,諸国の境を調べさせる(紀).			隋,陳を滅ぼして,中国を統一する.		9	3			嬰陽王←
	590	3	庚戌	善信尼ら,百済より帰国し,桜井寺に住む(紀).			隋,高句麗王を上開府儀同三司遼東郡公とする. グレゴリウス1世,教皇となり(～604),教権伸張する.		10				

第2表 年表(591年～620年)

文化時代	西暦	「日本書紀」	干支	日本	大臣	世界	隋	新羅	高句麗	百済
(古墳時代後期)	591	崇峻 4	辛亥	任那復興のため，紀男麻呂らを大将軍とし，2万余の軍を筑紫に送る．新羅と任那に使を派遣する(紀)．	(蘇我馬子)	新羅の真平王，南山新城を築く．	11	(真平王)	(嬰陽王)	(威徳王)
	592	5	壬子	法興寺(飛鳥寺)の仏堂と歩廊をつくる(紀)．蘇我馬子，東漢直駒に天皇を殺させる(紀)．			12			
	593	推古	癸丑	1 法興寺(飛鳥寺)の刹柱を建て，その礎中に仏舎利を置く．4 厩戸皇子(聖徳太子)を太子とし，摂政とする．9 用明天皇を河内磯長陵に改葬する．この年，四天王寺を難波の荒陵に造る(紀)．			13			
	594	2	甲寅	2 厩戸皇子と蘇我馬子に詔して，三宝を興隆させる．臣・連ら，競って仏舎(寺)を造る(紀)．		新羅，初めて隋に入貢し，上開府楽浪郡公を授けられる．	14			
	595	3	乙卯	5 高句麗僧慧慈渡来し，厩戸皇子の師となる．7 筑紫派遣の将軍ら帰る．この年，百済僧慧聡来る(紀)．		隋，州県の下僚をも中央から任命し，官僚制の集権化をはかる(郷官廃止)．	15			
	596	4	丙辰	10 厩戸皇子，慧慈・葛城臣と伊予温湯に行く(釈日本紀所引碑文)．11 法興寺(飛鳥寺)完成し，蘇我馬子の子善徳を寺司とする．慧慈・慧聡，法興寺に住む(紀)．			16			
	597	5	丁巳 ④	4 百済王，王子阿佐を遣わして朝貢する．11 難波吉士磐金を新羅に遣わす(紀)．			17			
	598	6	戊午	4 難波吉士磐金，新羅から帰る．8 新羅，孔雀を貢進する(紀)．		隋の文帝，高句麗に出兵，失敗．	18			恵王
	599	7	己未	4 地震により舎屋倒壊する．四方に地震神を祭らせる．9 百済，駱駝・羊などを貢進する(紀)．			19			法王
	600	8	庚申 ①	2 新羅と任那とが戦う．この年，新羅の5城を攻める．新羅降服する．難波吉師神を新羅に，難波吉士木蓮子を任那に遣わす．両国，調を貢進する．新羅，また任那を侵す(紀)．隋都大興城(長安)に使を派遣する(隋書倭国伝)． この頃，関東・東北地方で横穴式石室をもつ古墳がさかんにつくられる． この頃から，畿内では前方後円墳がつくられなくなり，天皇陵をふくむ大形古墳も方墳(用明陵古墳・推古陵古墳・石舞台古墳など)となる．関東で群集墳がさかんにつくられる． (古墳の築造は，畿内・西日本では7世紀前半ころ，関東では8世紀はじめころ，東北地方では8世紀末ごろでほぼ終わる)．		この頃，ハザル汗国，黒海・カスピ海北方の草原で繁栄(～900頃)．古典マヤ文明後期始まり，グアテマラ北部の森林に神政都市国家を築く．	20			武王
	601	推古 9	辛酉	2 厩戸皇子，斑鳩宮を造る．3「任那」回復のため，大伴囓を高句麗に，坂本糠手を百済に遣わす．11 新羅への攻撃を計画する．	(推古)	10 百済僧観勒渡来し，暦・天文地理・遁甲方術の書をもたらす．	仁寿 2	(真平王)	(嬰陽王)	(武王)
	602	10	壬戌 ⑩	2 来目皇子を撃新羅将軍に任ずる．国造・伴造らの軍2万5千人を動員する．4 皇子，筑紫に到着する．6 皇子，病気にかかる．		11 秦河勝，蜂岡寺(広隆寺)の造営を開始する．	3			
	603	11	癸亥	2 来目皇子，筑紫で病死する．4 当麻皇子を征新羅将軍に任ずる．7 当麻皇子，随伴した妻の死により赤石から帰る．新羅攻撃を中止する．10 小墾田宮に移る．12 冠位十二階を制定する．		9 黄書画師・山背画師を定める．	4			
	604	12	甲子	1 冠位十二階制を施行する．4 厩戸皇子，憲法十七条を作る．9 朝礼を改める．		4 高句麗，造仏用の黄金を貢進する．	煬帝 大業			
	605	13	乙丑 ⑦							
	606	14	丙寅			この年，厩戸皇子，勝鬘経・法華経を講経するという．	ハルシャ・ヴァルダナ王即位(異説あり，～648年ごろ)．この時代に玄奘，インドに行く． 2			
	607	15	丁卯	2 壬生部を定める．7 小野妹子らを隋に遣わす．この冬，大和・山背・河内に池・大溝を造り，国ごとに屯倉を置く．		この年，斑鳩寺(法隆寺)の金堂薬師像成るという．	隋の煬帝，大業律令を公布． 3			
	608	16	戊辰 ③	4 小野妹子，隋使裴世清らとともに帰国する．8 隋使，朝廷に参入する．9 裴世清，帰国する．小野妹子ら，また隋に遣わされる．この時，高向玄理・僧旻・南淵請安ら8人，隋へ留学する．「戊辰年五月」の紀年銘をもつ鉄刀が兵庫県養父郡八鹿町の箕谷2号墳から出土している．			4			
	609	17	己巳	9 小野妹子ら，帰国する．		4 飛鳥寺の丈六釈迦像成る．	5			
	610	18	庚午 ⑪	1 隋に使を派遣する．10 新羅・「任那」の使人を朝廷に迎える．		3 高句麗王派遣の僧曇徴，彩色・紙・墨・碾磑の製法を伝える．	ムハンマド(マホメット)が預言者と自覚し活動を開始．隋，大運河を完成． 6			
	611	19	辛未	5 菟田野に薬猟．8 新羅・「任那」の使，朝貢する．			隋の煬帝，高句麗遠征を宣言，準備開始．山東・河北で農民蜂起． 7			
	612	20	壬申	5 羽田に薬猟．		この年，百済人味摩之，伎楽舞を伝える．	隋の煬帝，高句麗遠征(～614)． 8			
	613	21	癸酉 ⑧	11 大和に池を造る．難波より大和にいたる大道を造る．			隋の官僚楊玄感反乱，農民反乱が全国に拡大． 9			
	614	22	甲戌	5 薬猟．6 犬上御田鍬らを隋に遣わす．		8 蘇我馬子の病気平癒のために，男女1千人出家させる．	10			
	615	23	乙亥	9 犬上御田鍬ら帰国する．百済使，御田鍬に従って来る．		11 慧慈，高句麗に帰る．	11			
	616	24	丙子 ⑤	3～7 屋久島の人，渡来する．		7 新羅，仏像を貢進する．	12			
	617	25	丁丑				恭帝 義寧			
							唐			
	618	26	戊寅	8 高句麗，方物を貢進し，隋の滅亡を伝える．			煬帝殺され，李淵，唐を建てる(～907)． 高祖 武徳 2			栄留王
	619	27	己卯 ①							
	620	28	庚辰	この年，厩戸皇子・蘇我馬子，「天皇記・国記，臣連伴造国造百八十部并公民等本記」を記す．			3			

第3表 年表(621年～660年)

西暦	「日本書紀」	干支	政治	社会・文化	天皇	大臣	世界	唐	新羅	高句麗	百済
621	推古29	辛巳⑩	この年，新羅朝貢する．		(推古)	(馬子)	新羅，倭典を領客典に改める．唐に高句麗・新羅・百済が朝貢．	4	(真平王)	(栄留王)	(武王)
622	30	壬午	2 厩戸皇子，斑鳩宮で没する(49)．	この年，厩戸皇子の妃・橘大郎女ら，天寿国繍帳を作る．			ムハンマド，メッカからメディナにヒジュラ(聖遷)．ヒジュラ暦元年．	5			
623	31	癸未	7 留学生恵日ら帰国する．この年，新羅，「任那」を討つ．日本，軍を「任那」に遣わす．新羅，服し，両国(新羅・「任那」)の調を貢進する．	7 新羅・「任那」，仏像・舎利等を貢する．			この頃，ボヘミア周辺にスラヴ族最初のサモ王国建国(～658)．	6			
624	32	甲申⑦	10 蘇我馬子，葛城県を要求する．天皇，許さず．	4 僧正・僧都を任じて，僧尼を取締る．また，法頭を任ずる．9 寺と僧尼を調査する．			唐，武徳律令を公布．唐，高句麗王を上柱国遼東郡王高麗王，百済王を帯方郡王，新羅王を楽浪郡王に冊封．	7			
625	33	乙酉		1 高句麗王，僧恵灌を貢進する．恵灌を僧正に任ずる．				8			
626	34	丙戌	5 蘇我馬子没．	この年，霖雨．大飢饉がおこる．		蘇我蝦夷	(唐)いわゆる貞観の治はじまる(～649)．	9 太宗貞観			
627	35	丁亥③									
628	36	戊子	3 推古天皇，病気重く，田村皇子と山背大兄王とに遺言して没する(75)．9 遺詔をめぐって群臣争い，蘇我蝦夷，一族の境部摩理勢を殺す．				唐，全中国を統一する．	2			
629	舒明	己丑⑪	1 田村皇子即位する．4 田部連らを屋久島に遣わす．					3			
630	2	庚寅	1 宝皇女を皇后とする．3 高句麗使の宴子拔，百済使の素子ら来る(9月帰国)．8 犬上御田鍬・薬師恵日を唐に遣わす(第1次遣唐使)．9 田部連ら，屋久島から帰る．10 岡本宮に移る．この年，難波大郡・三韓の館を修理する．		1 舒明		唐，東突厥を滅ぼす．	4			
631	3	辛卯	3 百済王子豊璋，人質として日本に来るという．					5			
632	4	壬辰⑥	10 犬上御田鍬ら，唐使の高表仁らとともに帰国する．学問僧霊雲・僧旻らも帰国する．				ムハンマド没，カリフ制始まる．	6	善徳王		
633	5	癸巳	1 唐使の高表仁ら，帰る．					7			
634	6	甲午						8			
635	7	乙未⑤	6 百済使の柔らが来る．				景教(ネストリウス派キリスト教)，唐に入る．	9			
636	8	丙申	6 岡本宮火災，田中宮に移る．7 大派王，蘇我蝦夷に群卿百寮の朝参の弛廃を非難する．蘇我蝦夷は従わずという．	この年，大旱で天下飢える．			アラブ軍，シリアでビザンツ軍を破る．	10			
637	9	丁酉	この年，蝦夷叛いて入朝せず．上毛野形名を将軍として蝦夷を討つ．				アラブ軍，イラクを征服．唐，貞観律令を公布．	11			
638	10	戊戌②	この年，百済・新羅・「任那」，朝貢する．					12			
639	11	己亥	7 百済川畔に大宮(百済宮)・大寺(百済寺)の造作を開始する．西の民は宮を造り，東の民は寺を造る．9 学問僧恵隠・恵雲，新羅の送使に従って唐から帰国する．12 天皇，伊予の温湯宮に行く．	12 百済川のほとりに九重塔を建てる．				13			
640	12	庚子⑩	4 天皇，伊予から帰り，厩坂宮に入る．10 学問僧南淵請安・留学生高向玄理，唐から帰国する．百済使・新羅使，ともに来朝する．天皇，百済宮に移る．				唐，高昌国(吐魯番)を滅ぼし，西域へ勢力拡大．この頃，ジャワに訶陵国台頭．	14			
641	舒明13	辛丑	10 舒明天皇，百済宮で没する．		(蝦夷)		唐の文成公主，吐蕃王に嫁する．アラブ軍がエジプトを征服．	15	(善徳王)		義慈王
642	皇極	壬寅	1 宝皇后即位する．蘇我蝦夷の子入鹿(鞍作)，自ら国政を執る．6～8 大旱．蘇我蝦夷の祈雨は効なく，天皇の祈雨は雨降るという．9 百済大寺と飛鳥板蓋宮の造営のため，百姓を徴発する．12 天皇，小墾田宮に移る．この年，蘇我蝦夷，祖廟を建て双墓を造る．		1 皇極		(西ア)ニハーヴァンドの戦い(年代に異説あり)．高句麗の泉蓋蘇文，専権をふるう(～665)．	16		宝蔵王	
643	2	癸卯⑦	4 筑紫大宰，追放された百済国王の子翹岐らの入国を知らせる．飛鳥板蓋宮に移る．6 筑紫大宰，高句麗使の入国と高句麗の内乱を報ずる．10 蘇我蝦夷，私に紫冠を入鹿に授け，大臣の位に擬する．11 蘇我入鹿，巨勢徳太らを遣わし，山背大兄王を斑鳩宮に襲う．山背大兄王の一族，斑鳩寺で自殺．					17			
644	3	甲辰	7 東国で常世神への信仰が流行する．秦河勝がこれを鎮める．11 蘇我蝦夷・入鹿，甘橿岡に家をならべ建て，戦備をととのえる．				唐，高句麗に対し新羅・百済の兵を徴する．	18			
645	大化6.19	乙巳	6 中大兄・中臣鎌足ら，宮中で蘇我入鹿を暗殺する．蘇我蝦夷自殺する(乙巳の変)．皇極天皇譲位し，軽皇子即位する．中大兄を皇太子とする．阿倍内麻呂を左大臣，蘇我倉山田石川麻呂を右大臣，中臣鎌足を内臣に任ずる．8 東国等の国司に，戸口調査・校田を命ずる．鐘匿の制を定める．また，男女の法を定め，良民・奴婢の子の帰属を決める．9 吉野に隠退した古人大兄，殺害される．12 都を難波長柄豊碕に移す．	8 僧尼の十師制を定める．また，法頭を任ずる．		6 中臣鎌子(鎌足)	唐，第1次高句麗遠征．玄奘，インドより帰る．	19			
646	2	丙午③	1 改新の詔を宣する．3 東国国司の政績を評定する．官司の屯田を廃止する．中大兄，入部と屯倉を献納する．8 品部の廃止，冠位制・男身の調の制を命ずる．9「任那」の調の貢進を廃止する．	3 薄葬の制を定める．また，旧俗の改廃を行なう．この年，僧道登，宇治橋を造る．	6 孝徳	6 左大臣 阿部内麻呂	高句麗，唐に謝罪．	20			
647	3	丁未	4 品部の廃止にともない，庸調を支給する詔を出す．12 皇太子の宮焼ける．この年，七色十三階の冠位を制定する．また，渟足柵を造る．			6 蘇我倉山田石川麻呂	唐，再び高句麗遠征．この頃，新羅，贈星台建立．	21		真徳王	
648	4	戊申⑫	4 古冠をやめ，新冠位を施行する．この年，磐舟柵を造る．				唐，第3次高句麗遠征．	22			
649	5	己酉	2 冠位十九階を制定し，官司をおく．3 蘇我倉山田石川麻呂，謀反の疑いをかけられ，山田寺で自殺する．	3 阿倍内麻呂没．		4 左大臣 巨勢徳太	新羅，百済軍を破る．	23 高宗永徽			
650	白雉2.15	庚戌	2 穴戸国より献上された白雉により改元する．	10 丈六の繡仏像などを造る．この年，漢山口大口，千仏像を彫刻する．		4 大伴長徳					
651	2	辛亥⑨	12 天皇，新宮の難波長柄豊碕宮に移る．この年，新羅の貢調使を唐服着用により，放逐する．	7 大伴長徳没．12 味経宮で一切経を読ませる．			唐，永徽律令を公布．サーサーン朝滅亡．	2			
652	3	壬子	1 班田するという．4 造籍するという．9 難波長柄豊碕宮完成する．					3			
653	4	癸丑	5 吉士長丹らを遣唐使に任ずる．この年，中大兄，天皇と不和となり皇祖母・皇后らと，飛鳥河辺行宮に移る．	6 僧旻没．				4			
654	5	甲寅⑤	2 高向玄理らを遣唐使に任ずる．4 吐火羅国と舎衛の人，日向に漂着する．10 孝徳天皇，難波宮で没する．	この年，高向玄理，唐で客死する．			唐，新羅王を開府儀同三司楽浪郡王に封ずる．	5		武烈王	
655	斉明	乙卯	1 皇極女帝重祚．この冬，飛鳥板蓋宮焼け，飛鳥川原宮に移る．		1 斉明			6			
656	2	丙辰	この年，後飛鳥岡本宮に移る．両槻宮・吉野宮を造る．香久山と石上山の間に渠を掘り，石材を運ぶ．時の人，狂心の渠と呼ぶ．					顯慶			
657	3	丁巳①	9 有間皇子，狂人をよそおう．天皇に，紀の牟婁温湯を推奨する．					2			
658	4	戊午	4 阿倍比羅夫，齶田・渟代の蝦夷を征討する．10 天皇，紀温湯に行く．11 有間皇子，殺害される．	1 巨勢徳太没(66)．この年，僧智踵，指南車(磁石を利用した車)を造る．			唐，西突厥を滅ぼす．唐，高句麗を攻める．	3			
659	5	己未⑩	3 阿倍比羅夫，蝦夷を討つという．7 坂合部石布らを遣唐使に任ずる．					4			
660	6	庚申	3 阿倍比羅夫，粛慎を討つ．9 百済の使，新羅・唐軍の攻撃による百済の滅亡を伝える．10 百済の鬼室福信，救援と王子余豊璋の返還を要請する．12 天皇，難波宮に移り，戦争を準備する．				唐・新羅，百済を滅ぼし，熊津等5都督府を置く．	5			